



# 西松会新聞

The Yushokai Shimbun



## 第 16 号

令和 5 年 (2023)  
3 月 7 日 発行

### 巻頭挨拶 P3

- ⚽ 緒方 徹 (昭 49 卒 会長) : 「日々是好日」
- ⚽ 木村 義幸 (平 6 卒) : 西松会代表幹事就任挨拶
- ⚽ 村上 信勝 (昭 36 卒) : 小平人工芝グラウンド完成に寄せて

### 特集：カタール W 杯観戦記 P8

- ⚽ 樋口 哲司 (昭 59 卒) : 行ってきました。カタール！！
- ⚽ 福本 浩 (昭 52 卒) : 革命的!? “ホンダ解説、の解説

### 海外便り P19

- ⚽ 角井 朋之 (平 11 卒) : ミャンマーでの生活
- ⚽ 木村 英生 (平 18 卒) : フランクフルトでの Enjoy Soccer 生活
- ⚽ 山崎 文佳 (平 26 卒) : ニューヨークおすすめ観光スポット
- ⚽ 小泉 武広 (平 28 卒) : 香港でのバルサ生活

### 百年史秘話 P36

- ⚽ 福本 浩 (昭 52 卒) : 甦る! 商大サッカー部の古写真

## 戦いを終えて P45

- 加藤 紘基（4年主将）：悔しさと感謝が残った4年目
- 皆川 開（4年GM）：「ア式」を紡いでいく
- 遠藤 慎之介（4年）：変化、それでもア式はア式。
- 長田 陸（4年）：ア式生活の振り返り
- 佐藤 由都（4年）：成長できた4年間
- 東明 建志（4年）：棚から牡丹餅
- 澁谷 亮佑（4年）：「学生主体」を考え直す
- 鈴木 春平（4年）：失敗の日々
- 福嶋 謙志（4年）：最高のア式生活
- 堀 伊吹（4年）：ア式4年間を振り返って
- 宮津 佑介（4年）：期待を超える
- 山本 怜央（4年）：自分の実力を知った4年間
- 七海 碧（4年MGR）：ア式での学びに感謝

## 令和5年度シーズンに向けて P68

- 渡邊 直樹（新4年主将）：最大の挑戦
- 近岡 頌（新4年学生監督）：成長を成果に

## 私の学生 LIFE P72

- 海谷 俊輔（4年）：留年の原因をまじめに考えてみた。
- 岩元 陽菜（4年MGR）：私のバイトライフ
- 向井 友紀（新4年）：ア式に費やす大学時代とは
- 大石 俊輔（新3年）：私の小平キャンパスライフ
- 松田 宥之介（新2年）：アシキのジョー

## 追悼 P83

- 有志一同：逝きし仲間を偲んで

## 編集後記 P97

- 福本 浩（昭52卒 編集長）：「小平」の歴史に揺蕩う

## 🏆 「日々是好日」

緒方 徹 (昭49卒) 西松会会長



この原稿を書いている時点で、新しくヘッドコーチを迎えたア式は、2023年の活動をスタートさせている。今年の干支は60年に一度の「癸卯（みずのと）」で、私は歳男になる。「癸卯」はこれまでの努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍するような年になると伝えられている。また寒気が緩み萌芽を促す年になるとも。ア式のこの1年がそうであるようにと心から声援を送りたい。

「日々是好日」（にちにちこれこうじつ）

この言葉は皆さんも目にしたことがあるかもしれない。

中国の著名な雲門禅師が残した大変有名な言葉で「碧巖録」という書物に載っている。特に茶道の世界ではとても大切にされていて、掛け軸として茶席に掲げられることがよくある。文字通り、毎日毎日が最良の日であり、辛い日も悲しい日も、それを良き日と受け取ってゆくということである。口で言うのは簡単だが、人間は何かしらわだかまりを持ち、怒ったり悲しんだりするのが普通である。また過去に拘り未来に過大な希望を抱きやすい。そのような計らいの心から離れて、取り巻く環境を徹底的に見据えたうえで、実際に生きていることの感謝を知る。そうすることで毎日が好日となるというのである。私達が生きている現在の社会は厳しいものだが、毎日が吉祥の日であるという心がけでいれば、充実した後悔のない日々を送ることの助けになるのではないだろうか。現役諸君が学問、ア式の練習・試合、社会貢献と取り組んでゆく中で、この言葉を思い出してくれたら幸いである。

今年は関東リーグに3部が誕生し、東京都リーグも大幅な編成替えとまさしく大きな変化の年になる。世界を見れば戦禍は収まらず巨大地震も発生。新型コロナは患者数が減少しているように見えるが不透明な部分も残る。国内外の歴史的情勢、経済・社会状況は激動の中にある。現役諸君とOB・OG、そして関係する皆さんの活躍と安寧を切に願う。



## ⚽ 西松会代表幹事就任挨拶

木村 義幸 (平6卒)



この度、金谷さんのバトンタッチを受け代表幹事に就任しました木村です。平成6年(1994年)卒業で、現役時代は東京都2・3部リーグで戦っておりました。卒業後は銀行に就職。現在は証券会社で勤務しております。サッカーとの関わりは、20~30代は神奈川県の人社会人リーグと銀行のインターバンクリーグ、40代以降は地元杉並のシニアクラブ、最近は転勤先の鎌倉のクラブで活動しております。大学のサッカー部との関わりはOBOG会への参加や現役の公式戦観戦などに限られ、西松会としての活動は人工芝の資金集めに少し関与をした程度で幹事としての経験はありません。会長・副会長をはじめ、幹事・会員の皆様のご支援を賜りながら現役の活動をサポートしてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。今回の幹事会役員の人事変更は下記の通りです。

### 【退任】

### 【新任】

- \*副会長 : 鈴木 茂 (昭54卒) ⇒ 橋詰 邦弘 (昭56卒)
- \*代表幹事 : 金谷 斎 (平1卒) ⇒ 木村 義幸 (平6卒)
- \*副代表幹事 : 諏訪部 伸吾 (平7卒) ⇒ 松井 伸太郎 (平7卒) 総務通信・OBOG総会担当



平成6年度 卒業アルバムより

木村義幸

永年の懸案であった「小平グラウンドの人工芝化」と「創部 100 周年事業」につきましては、コロナ禍の苛酷な環境の中で、緒方会長・金谷代表幹事をはじめ幹事の皆様の多大なご尽力により実現に至りました。当面は大きなイベントはありませんが、足元の懸案事項としては「将来の人工芝張替え費用の捻出」「OBOG 間の繋がり強化」「寄付金の増強」の 3 点で、年始に開催された OBOG 総会でも早期に解決していこうということで確認をしております。

★2021 年 3 月 小平人工芝 G 竣工



「人工芝の張替え費用」のサッカー部負担額は 75 百万円程度と試算しておりますが、寄付金控除制度の活用、東京都サッカー協会からの資金捻出など、10 年先を見据えた取り組みを今からスタートしております。今後は大学サイドとの協議も進めていく予定で進捗状況については改めてご報告をさせていただきます。

「OBOG 間の繋がり強化」「寄付金の増強」については、例えば人工芝化された小平グラウンドで世代別の交流戦・三商大戦・商東戦を開催、あわせて寄付金の口座振替手続きを行ってもらい寄付の増強に繋げていくことなど、小平グラウンドを有効に活用して、現役と OBOG、世代を超えた交流の場を増やしていきたいと思っております。

現役の活動に関して、自分の現役時代に比べると、個々人の技術面での向上もさることながら、組織面では事業部制を導入するなど学生主体でとても上手く運営していると感じます。西松会としても、学生の主体性を尊重し、物心両面でサポートを行っていききたいと思います。

最後に学生の皆様へ一言。

何だかんだ言っても、現役がリーグ戦で好成績をおさめることが OBOG の一番の喜びです。翌日の仕事や生活への活力が変わります。今年は新しい外部コーチも招いて体制は強化されました。是非東京都 1 部昇格を目指して全力蹴球で取り組んでいきましょう！！

## ⚽ 小平人工芝グラウンド完成に寄せて

村上 信勝 (昭36卒)

2022年12月4日、60年ぶりに小平に出かけ、新しく完成したばかりの人工芝グラウンドでのOB戦を観戦した。第一印象は、試合中ボールを蹴っても、タックルしても、砂ぼこりが舞うこともない景色に、びっくりした。私の時代は、人工芝で練習や試合をしたことがないので、とても新鮮に感じた。



私は昭和32年(1957)に入部した時から4年間ずっとゴールキーパーだった。走るの苦手、また眼鏡をかけていたのでキーパーを希望し、2年先輩の駒井康さんに連日初歩から鍛えられた。先輩キーパーが欠場気味だったので、1年生の秋のリーグ戦から試合に出ることになった。硬い土のグラウンドでの試合や練習のセービングで、たびたび腰を打撲し、外科医院に行ったことを思い出した。



昭和41年(1966)夏合宿 於小平グラウンド



令和4年(2022)OB戦 於小平グラウンド



人工芝に触れてみると、とても柔らかいが、  
 しっかりと敷きつめられている。まるで絨毯のような感触である。  
 これなら、怪我も大幅に減ることだろう。久しぶりに、ボールやスパイクにも触れてみたが、  
 とても進化している。スパイクは、スニーカーのように軽いものになっていた。  
 現役の学生諸君は、この恵まれた環境で、しっかりと練習し、体力と精神力を鍛えてほしい。  
 そして、卒業後には、世界に雄飛する人材となって、活躍されることを祈念します。



## 特集：カタールW杯観戦記

### 🏈 行ってきました。カタール!!

樋口 哲司 (昭 59 卒)

私は MS&AD ホールディングスという会社で副社長、  
そしてグループ CFO という仕事をしている。

MS&AD グループは日本サッカー協会の  
メジャーパートナーとなっていて、田嶋会長から

「W 杯は是非見に来てほしい」と誘われたこともあり

何とかスケジュールをやりくりして、ドイツ戦、コスタリカ戦を観戦してきた。

ドイツ戦は 11 月 23 日。実は 22 日に投資家向けの決算発表会があり、終了後に会社で着替えて  
成田に直行。深夜便のカタール航空機 (21:55 成田発) に搭乗し、一路ドーハへ向かった。



田嶋会長

樋口



### ドイツ戦

カタール・ドーハには 23 日の早朝 5:00 到着。  
空港は各国のウェアを着たサポーターで溢れかえり、  
ロビーには W 杯のモニュメントもあり、いよいよ来たぞ！  
空港からホテルへは車で 30 分程度。ちなみにホテルの  
部屋は空調が 18℃に設定されていて、めちゃ寒い。  
温度を上げようとしたけど最高が 22℃で、それでも寒い。  
結局、オフに。滞在中、空調は切りっぱなしだった。

さて、戦いの場、ハリファ国際スタジアムへ、いざ出発！

協会のスポンサー一同での観戦ということで VIP 席を確保いただいた。引率者は宮本恒靖さん。  
ここで、事件が…。今回の W 杯は観戦チケットの多くが WEB で提供されていたのだが、  
ドイツ戦直前にシステムがダウンした模様。我々は紙のチケットだったので、何の問題もなく  
入れたのだが、宮本さんは WEB チケットだったので、入り口で足止めに。

「彼は日本代表の元キャプテンで、W 杯にも出場していたんだぞ」とか説明してみたけど、  
係の人には受け付けてもらえなかった。結局、システムの回復で無事に入場できたのだが、  
試合開始前のちょっとしたドタバタ、「やれやれ」という感じ。

それと、カタールはイスラム教の国ということもあり、

大会直前にスタジアムでのアルコール飲料の提供が見合わせになった。

ただ VIP 席は特別ということで、ワインや大会スポンサーであるバドワイザーの W 杯ラベルの  
ビールが供されていた。VIP 席には KAZU も姿を現し、否が応でも雰囲気は盛り上がる。

前日にサウジアラビアがアルゼンチンに勝つという大番狂わせ。我々も大いに勇気づけられた。

「日本も行けるぞ！ジャイアントキリングだ！」と。



私の隣は、日本代表のオフィシャルサプライヤー・adidas ジャパンのトーマス社長。  
 実は彼、ドイツ人。日本サッカー協会のご招待なのに、ドイツ代表のユニフォームを着て観戦。  
 当然、ドイツが負けるなんて1ミリも思っていないので余裕しゃくしゃく。  
 その隣が、協会の反町技術委員長というフォーメーション。  
 (何のフォーメーションか意味不明という突っ込みはご容赦いただければ…)



いよいよキックオフ。日本人の魂をもって、日本人としての誇りをもって応援するゾ。  
 トーマスに「ドイツはラウムが高めのポジションをとるから、その裏を伊東純也が突き逆サイドで仕留めるのが日本の戦術」とか喋っていたら、何と開始8分、遠藤 航が中盤でパスカット。  
 言ってた通りにラウムの裏へのパスで伊東を走らせ、伊東のクロスから前田がナイスゴール!!  
 スタジアム全体も大興奮。しかーし、残念ながらオフサイドの判定。私の席からはまったく  
 オフサイドに見えなかったけど、あとでVTRを見たら完全に出ていた。宮本さんが、  
 「前田は足が速いんだから、あんなに前に出なくても余裕で決められたのに」と解説してくれた。

その後、このパターンは完全にケアされてまったくチャンスの気配なし。

トーマスは「ドイツは、左サイドをワイドに使ったら良い」とかなんとか言っていたが、  
 その展開が増えてきて、次第にドイツの一方的な攻勢に。前半33分(多分)、ミューラーから  
 右サイドのキミヒに展開され、そこから切れ込んで左サイドでフリーのラウムに。あわてて  
 飛び出した権田の足がラウムにかかりPK。これをギュンドアンに決められ失点。0-1。

「先制されたら苦しいよなあ…」なあって思っていたら、前半アディショナルタイムには、  
 再度ゴールネットを揺らされる。明らかにオフサイドと思ったが、副審のフラッグは上がらず。

「さすがにVARはあるだろう」と、やきもきしながら待っていたら、ようやくオフサイドの判定。  
 なす術なく前半は終わったという感じで、「よく1点に抑えたな」と。ただ、このままいくと、  
 後半、大量失点もありうるイヤ～な雰囲気。ハーフタイムは一同、どんよりした雰囲気、でもなく、  
 景気づけにバドワイザーを2本あおり、「行くぞ、後半!」と気合を入れる。

後半の頭から、久保アウト、富安イン。

3バックにフォーメーションを変更したことはすぐに分かった。森保監督の早めの対応は GOOD。トーマスに「日本は3バックにしたぜ。中央の守備の強度が増すのと、両ワイドを広く使って攻撃するので、ウイングバックがうまく起点になると面白くなるかも」とか解説した。その隣の反町技術委員長は「こいつ、何言ってるんだろう?」と思っていたかも…。でも、実際、日本のボール回しは前半に比べるとかなり良くなった感じ。権田がどこにもパスの出し先を見つけられず、ロングボールを蹴ってドイツに回収されるという場面は極端に少なくなり、中盤でもスムーズにボールがつながるようになった。

後半 12 分には浅野と三笥を投入。

三笥のドリブルは、大会前から高く評価していたので、ここは大いに期待。

26 分には田中 碧に代えて堂安がイン。どんなフォーメーションになるの??

このあたりから誰がどのポジションなのか、スタンドからは把握しづらくなっていたし、それはドイツにとっても同じことだったかと。さらに、その2分後には酒井アウトで南野がイン。おいおい、右サイドバックに代えて左のミッドフィールダー??

「田中から堂安、酒井から南野って、超攻撃的布陣じゃん。森保監督、やるなあ!」

この交代の直後に、ゴールが生まれる。

★先発の布陣：4-2-3-1



★後半の最終布陣：3-6-1



三笥のドリブルから南野へ。南野はさらに切れ込み、ゴールライン近辺から中央に折り返す。ゴール前に飛び込んだ浅野には合わなかったが、ノイアーがはじいたボールを堂安がシュート。ゴーーーーール!! 欲しかった、欲しかった同点弾。スタジアム全体が大歓声。結構、周りの席の地元カタールの人も日本びいきで、ガンガンに祝福される。「同点、すげえドイツから勝ち点1取れるかも」などと小さいことを考えながら、それでもめっちゃくちゃ嬉しかった。

日本の2点目は後半38分。ハーフライン付近で得たフリーキック。板倉が蹴ったボールが浅野の前へ。ここで浅野が一生に一度とも思われる超ナイストラップでリュディガーの前に身体を入れる。ゴール前まで切れ込みニア上にナイスシュート。ゴーーーーール!!! 逆転。1点目以上に周りのカタールの人たちも大喜びで、祝福の嵐。実は、浅野の奇跡のトラップの瞬間、「んっ、オフサイドかも?」と嫌な予感がした、ドイツのCBも手を挙げてオフサイドのアピールしてたし。ただ、VARチェックの雰囲気なし。「もしかしたら本当に逆転? マジか、すげえ。」と歓喜に変わる。

こうなると気になるのが残り時間。「耐えてくれ!!」反町さんは私たち以上に居ても立ってもいられない状態みたいで、もう席から立ち上がり、通路で戦況を見つめている。いつの間にか、その隣にはJリーグの野々村チェアマン。こういう時は時間が過ぎるのが何と遅く感じるのか。それでも少しずつ時計は進み、ようやく90分。この大会、アディショナルタイムが異常に長くなっていたので心配したが、案の定「7分!」「長すぎない?」と思ったが後は応援するしかない。この7分がまた長く感じた。ドキドキする時間がようやく経過し、歓喜の瞬間がようやく訪れる。試合終了のホイッスル。

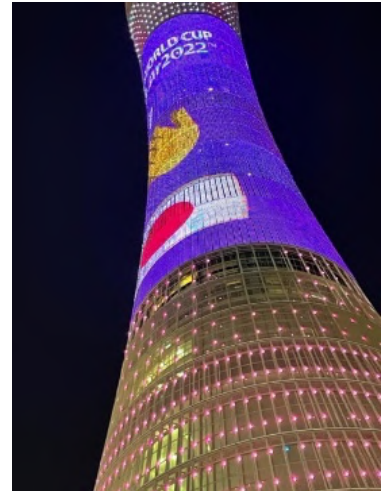
「マジか。ドイツに勝った!!」とにかく日本サポーターチーム全員が大喜び。隣で呆然とするトーマス。「今日は日本がラッキーだったけどドイツは本当に強い。スペインにも、コスタリカにも勝つだろうから、一緒に決勝トーナメントに行けると良いね」と励ます。だけど、星勘定から考えれば、ドイツがスペインに負ければ、日本の決勝トーナメント進出の可能性がかなり高くなるので、本心は「スペイン頑張れ」なんだけど、そんなことは口が裂けても言えない。それにトーマスは日本の勝利を祝福するという極めて紳士的な対応をしてくれたので、それに対しては、我々も真摯な態度で対応する必要があると思った。



宮本



試合終了後は、日本の青いシャツを着ている私とドイツの白いシャツを着ているトーマスが仲良くしゃべっているのを見たからか、「一緒に写真撮ってくれ」と何人も地元の人たちから頼まれ、記念撮影。それからVIPルームの部屋に戻り、関係者一同シャンパンで乾杯。しばらく歴史的な勝利の余韻に浸る。スタジアムから出ると、すぐ横にある塔に日本の勝利を祝福するライトアップが。ということで、第1戦、日本の歴史的な勝利の瞬間に立ち会えた喜びはこの上ないものがありました。



### 中3日

さて、次のコスタリカ戦までの3日間、どう過ごしたかという、「仕事」をしていた。ただ、せっかくカタールまで来ているので、W杯の試合も3試合ほど観戦しました。昼は仕事、夕方からW杯というリズム。カタールは天然ガスが豊富などとてもリッチな国で、ただし資源国特有の事情だが、資源が枯渇するリスクもあるわけで、資源があるうちに稼いだ資金を増やす、次世代に残すということが重要なミッションになっている。カタール投資庁という大変資金力があり、長期視点の投資家がいるので、当社の株を持ってもらいたいと面談。それと半期決算直後ということもあり、ヨーロッパの投資家とWEB面談。時差の関係もあり、ヨーロッパの投資家とも結構面談を設定でき、有意義だった。

ついでにカタール事情をいくつか。

ドーハの治安ですが、とっても良いと思った。街の辻々にお巡りさんが立っていることもあり治安は非常に良い。また、昼間、暑いということもあり、人々が活動し始めるのが夜なので、結構、夜遅くまで飲み食いしながら騒いでいるし、女性だけのグループでも全然安全という感じだった。前述のようにカタールはイスラム教の国なので、基本的にはアルコールは不可。スークワキーフという市場のような観光地があり、そこにはレストランも沢山あって、店の外のテーブル席でも結構飲み食いしているのだが、みんな水を飲んでいて。一方、我々が行ったレストランはすべてアルコールを頼むことが可能で（まあ、そういう所を選んでいただいたのだとは思いますが）、カタールはイスラム教国の割にアルコールについては寛容な感じがした。



今回の W 杯のためにメトロ網が整備され、車両や運行技術は日本のものということだが、無人運転で極めてスムーズ。すべての会場がメトロと直結。しかもスタジアムと駅が近い。で、至極便利。W 杯期間中は、観戦のためのアプリを提示すれば無料という至れり尽くせりの対応。



### コスタリカ戦

さて、そうこうしているうちに 11 月 27 日、コスタリカ戦。ここで勝ち点 3 が取れば、ドイツ vs スペイン戦の結果いかんで、決勝トーナメント進出も決まる大事な試合。気合満々でアフメド・ビン・アリー・スタジアムに向かう。

バスを降りて、会場までの間、みんなで記念撮影をしていたら、不審な人物がツカツカと歩み寄ってきて、

「FIFA のオフィシャルのツイッターなんだけど、日本のサポーターのことを紹介したいので、動画、取らせてもらって良いかな？」という打診。若干、怪しげな匂いはしたけど、動画をとられても、何か不都合があるわけでもなく、快諾。後日、FIFA のツイッターに本当に紹介されていたので、「本物だったんだ」とちょっとびっくり。

→ 参照：FIFA World Cup <https://www.youtube.com/watch?v=0WhvDxbDU5g>



さて、問題のコスタリカ戦。私はグループリーグの組合せが決まった時から

「コスタリカが一番ヤバイ」と周囲に公言してきた。簡単な相手ではないと思っていたので。しかし周りは「勝ち点 3 が当たり前」という雰囲気になっていて、しかも、初戦のスペイン戦でボコボコにされ、コスタリカ戦の楽観論がさらに高まり、ちょっと心配だった。

先発は、初戦のドイツ戦から 5 名入れ替えた。森保監督はベスト 8 を目指すと言っていたので、ターンオーバーは GOOD と思った。特にワントップの上田は W 杯直前のベルギーリーグで切れの良い動きを見せていたので、大いに期待していた。

キックオフ直後から、いきなり左サイドを相馬が崩すなど、エンジン全開の日本代表。  
 ただ、しばらく時間が経過するとイヤ～な予感が漂う。相手に5バックで固められて攻めあぐねるというアジアで苦戦するパターンを思い起こさせる展開。加えて、選手の動きがとっても重い。今回のW杯、会場はどこもエアコンがガンガンに効いていて観客席は寒いくらい。ピッチ上も同様にエアコンは効いているらしいが、このコスタリカ戦は午後1時からの試合で日本のエンドの大部分に直射日光が差し込んでいた。いくらエアコンが効いていても、直射日光が当たっていると暑いんじゃないかという話をしていたら、反町さんが「かなり暑いです」と。そのせいか、鎌田も遠藤も何でもないボールコントロールでミスをするし、守田も久しぶりの実戦のためか動きがものすごく重い。期待の上田もほとんどチャンスなし。とはいえ、コスタリカの攻撃もほぼ脅威になるものはなく、「まあ、さすがに負ける相手ではないな」というのが前半の感想。

★先発の布陣：4-2-3-1



★後半の最終布陣：3-6-1



後半、森保監督は交代選手を次々に投入し、攻勢を強めようとするが、相変わらず相手のブロックの手前でのボール回しに終始。全然スペースがない。ゴール前のFKなどのチャンスはあるものの決めきれない。そうすると81分に悲劇が。相手の右サイドへの何でもないボールを伊藤洋輝が吉田にフワッとパス。吉田はこれもフワッと守田にパス。いずれも軽いプレーだった。吉田のパスがずれたところを守田がスライディングでクリアしようとしたが、これが相手に引っ掛かる。守田のプレーも現場で見ていると超軽率に思った。相手に1回渡してもいいから、正面から向き合って守備の態勢をとれば良かったと思う。このボールをフレールが左足で、これもフワツとしたシュート。権田が何とか手に当たったもののボールは無情にもゴールへ。これがコスタリカが2戦を通じて放った初めての枠内シュートだった。その後、三笥のドリブルなどでゴールに迫ったものの、相手の堅い守りを崩せず、そのままタイムアップ。とっても痛い敗戦を喫した。ドイツ vs スペイン戦の結果にもよるけど、勝ち点を勘定すると、一転して、かなり厳しい状況だなぁ、と。

本当は祝勝会となるはずだった夕食の席も、ご覧の通り、かなりどんよりした雰囲気となってしまった。中央が宮本恒靖さん、その右隣りが私。



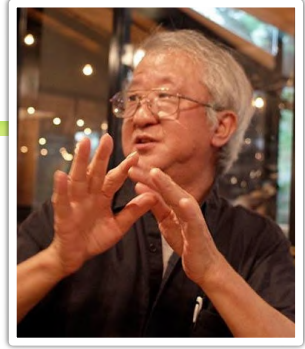
#### おまけ：ドイツ vs スペイン戦

実は、このどんよりとした夕食会のあと、ドイツ vs スペイン戦を観に行っただ。こちらは同日の午後 10 時からの試合。結果はご存じの通り 1 : 1 の引き分けだったのだが、この試合を観て、スペインの強さに圧倒された。本当にボール扱いがうまい上に、スピードもものすごく速い、かつ、どの選手も全力プレーで、チームとしても相当強いという印象を持った。「ドイツもよく引き分けに持ち込んだ、やっぱり勝負強いな」ということも印象付けられた。3 戦目はドイツがコスタリカに絶対勝つと思われたし、日本としてはスペイン戦に勝つしか決勝トーナメントへの道は残されていないというはっきりした形になったのは、かえってよかったなどと自分の中では何とか整理をつけたが、この試合を観た限りでは、「日本がスペインに勝つのは無理だよな」という印象で、コスタリカに負けたことに加え、さらに気分が落ち込んだのだった。

その後の展開は、皆さんご存じの通り。今回、日本代表の試合を 2 試合も見ることができ、W 杯を大いに堪能することができた。4 年後、日本代表がさらに飛躍することを大いに期待する。

## 🏆 革命的!? 「ホンダ解説」の解説

福本 浩 (昭52卒)



ABEMAで配信され話題となった、ケイスケホンダ（本田圭佑）の解説。とにかく面白かった。従来のサッカー中継の常識を破り革命を起こしたとさえ思う。長年サッカーをテレビ観戦してきたが、「ホンダ解説」のおかげで、今ピッチで何が起きているのか、どんな戦術的な駆け引きが行われているのか、この選手交代は何のためなのかなど、いろんなことが初めてわかってきた。それは何故だろうか？ 思いつくままに記してみたい。

まず従来の実況はアナウンサーが主役で、「間」が空くのを恐れるかのようにしゃべりまくる。パスが渡るたびに選手の名前を読み上げていくし（まるでラジオ中継のよう）、点がなかなか入らない膠着状態になると視聴者を飽きさせないようにと思うのか、チームの過去の戦績や選手の経歴など、試合の流れとは直接関係ないデータを長々と披歴する。その途中で突然訪れるゴールチャンス。で、中断。結局そんな情報は頭に残らない。また同じことを何度も繰り返すことになっていく。そして肝心の解説者はと言うと、実況アナが質問してから話し出すのがほとんどである。

ところがAMEBAの実況は、解説者のホンダが主役。彼は目の前でやっている試合のことしか語らない。しかも表現が独特だから、実況の寺川アナは「どういう意味ですか？」と聞き、ホンダの解説を補足説明する形で進む。というより図らずも、そういう形になってしまったのだ。ホンダは自由奔放で何を言い出すかわからんからね（笑）。例を挙げると・・・

### ドイツ戦

ホ「ギュンドアン うざいなあ」  
 寺「どういったところでしょう？」  
 ホ「どこで受けたら日本が嫌かわかってる」  
 ホ「伊東さん見てください。  
 今最終ラインにいて6バックになってる  
 タケと伊東さんが出ていけない  
 エネルギーがないんですよ」  
 寺「どうすれば改善できるんですか？」  
 ホ「僕やったら5枚気味にします・・・  
 5バック3ボランチ・・・5-3-2やなあ」





★ボルテージが上がってくると、もはや解説者ではなく、熱狂的なサポーター・・・

ホ「ズレが穴なのよ わかる？ もっとそこ狙っていけって」

寺「相手の右サイドです」

★前半終了間際、ドイツの2点目ゴールにVARチェックが入ると・・・

ホ「オフサイドオフサイド どう見てもオフサイド いきます 副審？

オフサイドじゃねーよみたいな雰囲気出してんですよ それが一番びっくりしてます」

★ドイツのシュートがゴールポストを叩いたときは・・・

ホ「いいよいいよ もうピンチは仕方ない 入らなきゃオッケー

ボール見ろ ボール見ろ すぐ」

★ロスタイムが7分と表示されると・・・

ホ「なあなふん！！嘘やろ」～「根性や こっから」

寺「あと1分半です」

ホ「もう時間稼げって サイドへ行けって タクマ ファウルもらえ 思いっきり」



#### スペイン戦

★極め付けは、ピッチリポートの槇野智章が加わった  
「三笥の1ミリ」・・・

槇「ラインは割ってないぞ オレの目の前だったぞ 今」

ホ「(スロー映像を観て) 出てたっほいで 槇野」

槇「ノォォウ！」

ホ「(別角度の映像を観て) ええっ！出てないかも！！」

解説を聴いていて思い出したのが、2018年のロシアW杯でスタメンではなく控えに回ったホンダがピッチサイドから声をかける姿だった。つまり「ホンダ解説」は、試合をしている選手と一緒に戦っている目線とテンションで語っているのだ。関西弁を隠さない、気持ちがこもったダイレクトな言葉だからこそ視聴者の心に響く。だから、わかりやすい。

さらに「ホンダ解説」は「間」が長いし、且つ多い。

「・・・めっちゃむずい・・・」そう言って悩んだり、迷ったり。時には試合に見入ってしまって、しばらく何もしゃべらない。でも視聴者にとっては、この「間」が大事なのだ。ホンダの解説を反芻する時間ができるから。もっと言うと、緊迫した場面こそ黙って見つめていたい。

映像が十分に語っているのだから、何もしゃべらないでほしいとさえ思う。

クロアチア戦

★前線から速いプレスを仕掛けゴールを狙う日本に対し、クロアチアは日本のDFラインの裏にロングボールを蹴り、そのクリアを拾いながら次第に押し込んでいく・・・

ホ「いやもうほんと、なんか雑い上げ方うざいわ～」  
寺「あの辺って感じで蹴ってくる」  
ホ「サッカーっておもしろいなあ～ ほんまに！  
あんないい加減な感じが一つの戦術っすからね」

★そして、ホンダの素の人間性が滲み出てきたのがPK戦が始まる前・・・

ホ「PKを・・・見ます？」  
寺「どういうことですか（笑）」  
ホ「見れます？」  
寺「なかなか厳しいですが・・・ベスト8への壁です！」  
ホ「いやあ・・・いや 見れないですよね」  
寺「ちょっとねえ」  
ホ「だってねえ ようやったじゃないですか PKってほんとに運だと思っんですよ やれることなすぎで（2010W杯の）パラグアイ戦もPKやったんで 2回目次はもう勝たせてよって・・・ほんまねえ 無理っす」  
寺「ほんとですわね」  
ホ「なんか思う 選手の気持ちを もう・・・なんかこんな言い方変ですけど こんな時だからこそ楽しくいきます じゃないと」  
寺「保ちませんか」  
ホ「痛すぎて いろんなところが・・・」

これはもう単なるサッカー中継ではない。  
極上の人間ドキュメンタリーを観ているようだった。  
こんな解説は、もう二度と聴けないだろう。  
一生記憶に残るであろう奇跡的なW杯だったからこそ生まれた、一期一会の解説だったと思うから。  
ただ、これからのサッカー中継は「ホンダ解説」のように今ピッチで行われている試合の状況を、十分な「間」と気持ちのこもった人間味あふれる言葉で伝えてほしいと願う。



## 🏈 ミャンマーでの生活

角井 朋之 (平 11 卒) ミャンマー味の素食品社



2022年7月より、味の素(株)からミャンマー味の素食品に出向し、ミャンマー最大の都市ヤンゴンに赴任しています。同社は2016年の設立で「味の素」等の調味料のリパック包装や粉末飲料等を製造し、ミャンマーの国内で販売する会社です。原材料の大部分は輸入に頼っているため、着任後しばらくは海外への支払いのための米ドルの管理、米ドルに依存しなくても事業を継続できる事業スキームの構築に追われ、半年が経過しました。今回の異動の内々示は昨年3月末のことで当時の上司から「クーデター後、厳しいビジネス環境だけどポテンシャルはある国なので、頑張って現地の事業を大きく成長させてきて欲しい」と伝えられました。ミャンマーはこれまで訪問したことがなく仕事上もほとんど関係したことがない国だったため、予想外の赴任でした。2021年にクーデターがあったことは認識していましたが、日本ではウクライナ情勢が報道の中心で、ミャンマーのことはほとんど取り上げられておらず、慌ててどんな状況かを確認、また前任者からの引継ぎによると、

- \*2021年2月1日に軍事クーデターが発生、当時リーダーのアウンサンスーチー氏は投獄、現在は軍事政権(国軍の最高意思決定機関の国家統治評議会が統治)となっている。
- \*クーデター後の民間人への弾圧、民主派勢力(反軍事政権派)・少数民族の部隊がいる地方の村への空爆や焼き討ち等の軍事行動等、人権侵害に対する欧米各国からの経済制裁の影響で海外からの投資・ODAが大きく減少、深刻な外貨不足となっている。
- \*2022年4月から米ドルへの両替は中央銀行の承認事項、銀行口座内の米ドルが自国通貨ミャンマーチャットへ強制兌換となる通達が発出される等、経済はかなり混乱している。
- \*国軍系企業との合併の解消や外貨不足を理由に事業の継続を断念する企業も増えている。
- \*ヤンゴン市内も頻繁に銃撃や爆発事件は起きているが、基本的には軍関係者を狙ったもので「気をつけていれば」危険ではない。等など、なかなか厳しそうな状況でした。

実際に当地で生活を始めてみると、治安面では、未だ危険な場面に遭遇したことはありませんが、ヤンゴン市内では毎週爆発や銃撃事件が発生しており、地方では国軍と民主派勢力との戦闘や政府が管理する鉄道や変電所が爆破される事件も起きています。そのため軍や警察関連施設周辺は車両の通行を制限するバリケードが設置され銃を構えた警備の詰め所には土嚢が積まれています。また州を跨ぐような移動時には必ずあちこちに検問所があり、軍が人の往来と危険物を確認、+外国人とわかると小遣いを要求します。

ビルが立ち並ぶヤンゴン市内



検問所手前の渋滞待ち



経済に関しては、通貨安を背景にしたインフレ（公定レートは22年8月に1ドルが、1850チャットから2100チャットに切り下がり、現在、市中レートは1ドル2850チャットで推移）、頻繁に内容が変わる外貨規制、外貨の流出を抑えるための当局による輸入ライセンス発行のコントロール（幸い経済特区内企業は影響なし）等、混乱が解消する兆しは感じられません。こういった状況なので、見積りがドル表示の原材料・サービスの購入時は為替レートの交渉からスタートするということがありますし、企業の中には現金を保有しているとリスクが高いため、値段が落ちない車や金の購入を検討するところもあります。また国の将来に希望を持ってない若者の仕事を求めた国外脱出が増加しています。これを阻止するためか、政府は突然パスポート発給を一時停止…。

★右はミャンマーの国民食  
ミャンマーカレー。  
インドのカレーとは違い、  
あまり辛い肉の煮込み料理で  
鶏、羊、豚、シーフードもある。  
1皿100円~220円で、  
ご飯と辛い小サラダ付き。



夕方に賑わうダウンタウンの屋台

ヤンゴン市内はビルが立ち並び他のアセアン諸国の都市とあまり変わりませんが、車で1時間も走った田舎では、電気は通じているものの高床式住居に暮らし薪で料理をしている集落も散見されます。街中では物乞いや物売りの子供たちをよく見かける一方、高級レストランは富裕層で満席といった感じで、ヤンゴンと田舎、富裕層と貧困層の経済格差が大きく、戦闘が行われている地域と安全な場所等の治安格差も大きく、何がこの国の普通なのか理解しにくいです。尚、23年8月までに総選挙が行われる予定でしたが、治安が回復していないことを理由に、軍事政権が緊急事態宣言を延長してしまったため、選挙が行われ形だけでも民政移管という可能性も、かなり低くなっていると見られており、この状況は当面は継続しそうです。さらに、欧米各国による経済制裁の影響で、武器調達や投資を呼び込むためにロシアとの関係を強化していることもあり、おかしな方向に進まなければと願うばかりです。

そんな明るい話題の全くないミャンマーですが、赴任後に良かったと思ったことを2つご紹介します。1つ目は毎週サッカーができることです。在ヤンゴン日本人ビジネスマンの共通(唯一?)の娯楽と言えばゴルフですが、それに物足りないスポーツマンの集まりとしては、サッカーが、日本人会のサークル活動の中では最大規模となっております。大人だけでなく小中学生・サッカー未経験者も交じり、週2回のフットサルの活動に毎回20~30名が集まり、汗を流し心身の健康を維持。また11人制サッカーの活動ができるくらいメンバーが集まってきたため、月に1~2回はミャンマー人チームとの練習試合も実施しています。海外遠征もバンコクで行われた日本人フットサル大会、クアラルンプールで開催された日本人0-40ミニ大会と2回実施する等、想定外に充実したフットボールライフを送ることができています。

〈フットサル大会@バンコク〉





〈クアラルンプール遠征〉

尚、メンバーには同じ製造業の他、金融、商社、大使館員、自営業の方など幅広い業界の方がいるため、グラウンドに行くに変化の激しいビジネス環境についても最新情報が入手できるということで、仕事面でも本当に助かっております。改めてサッカーという世界中でプレーできるスポーツの素晴らしさを実感すると共に、大学卒業後 24 年になりますが、プレーを続けてきて良かったと思っております。今年は久しぶりにアジアの駐在員サッカー大会 (J-Asia)、O - 40 サッカー大会 (O-Jin カップ) も再開とのこと。アジアに駐在、プレーを続けられているOBの方とグラウンドでお会いできることを楽しみにしております。

2つ目は、素晴らしい観光資源があちこちにあります。コロナとクーデターの影響で外国人観光客は皆無で寂しい限りですが、気候の良いこの乾季 (11-2 月) に治安状況を確認しながら幾つか観光地を巡ってきましたので、その写真も載せさせていただきます。またいつか安心して訪問できる日が来たら皆様の御来緬をお待ちしております！



★夕暮れのシュエダゴンパゴダ@ヤンゴン



★世界遺産@ピイ



★世界遺産@バガン

★田舎の仏教のお祭り





## 🏆 フランクフルトでの Enjoy Soccer 生活

木村 英生 (平 18 卒) Toray International Europe GmbH



2019年にフランクフルトに来てから、日本人のサッカーチーム FC Frankfurt Japan に所属している。活動は週1回、毎週土曜の朝8:30から2時間、主にチーム内でミニゲームや紅白戦。1年に1回はユーロ Japan といってヨーロッパ各国の日本人チームが1か所に集まる1日制の大会があり、そのほか同様のドイツ Japan や近くのドイツ人チーム等と練習試合をする。サッカーをした中で印象的だったのは、やはりドイツ人は当たりが強く足が長いため、対峙してボールキープするときの感覚が、なかなかうまくいかない。立場は全く違うが、海外に出る日本人プレイヤーが誰も通る苦労かと、勝手に想像する。



観るほうでは、昨年のW杯は、会社の会議室をパブリックビューイングとして使用し、ドイツ人と日本人が同部屋で、日本ードイツ戦（グループリーグ初戦）を観戦した。ご存じの通り、前半はドイツが一方向的に攻め、0-1（ドイツリード）で折り返す。同僚のドイツ人は同情する表情・言葉を投げかけてきて、日本人はぐうの音もでない。勝ちを確信して、前半だけ見て仕事に戻るドイツ人もいる始末。

一転、後半は、全く想像していないことに、堂安のゴールで同点。

その後、浅野のゴールで逆転。ゴール時や試合終了時は、しっかりと喜びを表現した。

ドイツ人もまだ1戦目ということもあり、若干の余裕で祝福してもらった。

なおグループリーグ最終戦（日本首位通過、ドイツ敗退）の次の日は、会社でドイツ人から同様に祝福はされたが、目は笑っていなかった。反応が難しく、「I am sorry」と返すので精一杯だった。



次にドイツ（フランクフルト）での生活・環境について、簡単に紹介する。

### 1. 住環境

広い公園や遊具施設が多く、  
子供にとってかなり恵まれている。

我が家も庭にリスや鳥が住む  
20メートル級の木があり、  
バラの花壇は5～8月まで咲き続ける。  
庭のテーブルにクルミを置いたら  
リスが来た。（右の写真）

日曜日は店がほとんど閉まるので、  
買い物は土曜。

光熱費が非常に高いので  
節約生活を続けている。



## 2. 家族観

毎年クリスマスには家に本物のツリーを飾る。  
ドイツ人は家族で過ごすことを大事にする。  
もっと見習いたい。

## 3. 食事

おいしいドイツ料理はソーセージくらいか。  
値段も外食だと日本の1.5倍以上。  
写真は社食のソーセージ定食。約1500円！



## 4. 旅行

年2回程度、ヨーロッパを満喫している。昨年はフランスで一面のラベンダー畑と  
ポルトガルで大西洋のビーチとおいしい料理を堪能。メッシを観にパリサンジェルマンの  
ホームスタジアムにも行った。しかし、地元フランクフルトのスタジアムには行ったことがない。

## 5. ドイツ人の印象

静かだが高い感性をもつという点で日本人と共通しているのではないか。  
本にあった「ドイツ人はライン川とメランコリーを愛する」という  
記事を同僚に確認したら、その通りだとのこと。

最後に、現役部員・マネージャーのみなさん、  
恐らく私の現役時代より、きっとサッカーや組織をよく理解し、  
部活に真摯に取り組んでいるかと思います。これからも、  
一つ一つ具体的な目標を定め、持ち味を伸ばしてってください。  
個人的には、いつでもボールをキープ・蹴れる感覚が大事だと  
思いますので、家の中でもボールを触り続けることをお勧めします。



## 🌐 ニューヨークおすすめ観光スポット

山崎 文佳 (平 26 卒 MGR) IHI Americcas Inc.

私は2021年6月にニューヨークに赴任し、夫と犬(ミニチュアダックスフンド)と暮らしています。結婚してからは夫の影響もあり割とインドア派になりましたが、ニューヨークに来てからは、せっかく来たのだから、と夫婦でニューヨーク近辺の観光を楽しんできました。そんな私のおすすめ観光スポットを紹介したいと思います。



### ① ガントリープラザ州立公園



私の家(アパートメント)のすぐ下にある公園で早速ご近所自慢のようになってしまおうのですが、マンハッタンの摩天楼がこれほど気持ちよく眺められる場所はどこ以外にはないと思っています。写真家にも人気のスポットで、マンハッタンのビル群の美しい写真を取めたい人におすすめです。マンハッタンから川を渡らなくてはならないのですが、グランドセントラル駅から地下鉄で1駅、4分で行くことができます。

### ② アメリカ自然史博物館

ここはガイドブックなどにもよく載っているし、映画「ナイトミュージアム」でも有名です。お子様連れはもちろん、大人だけでも十分に楽しめる博物館で、私も実際に行って、想像していた以上に楽しい時間を過ごしました。入ってすぐの展示室にある大きなクジラのオブジェは圧巻ですし、他のどの展示物も本物さながらで迫力満点です。1日では回り切れないほど広くてたくさんの展示物があるので、事前予習して、順路などを計画していくといいかもしれません。



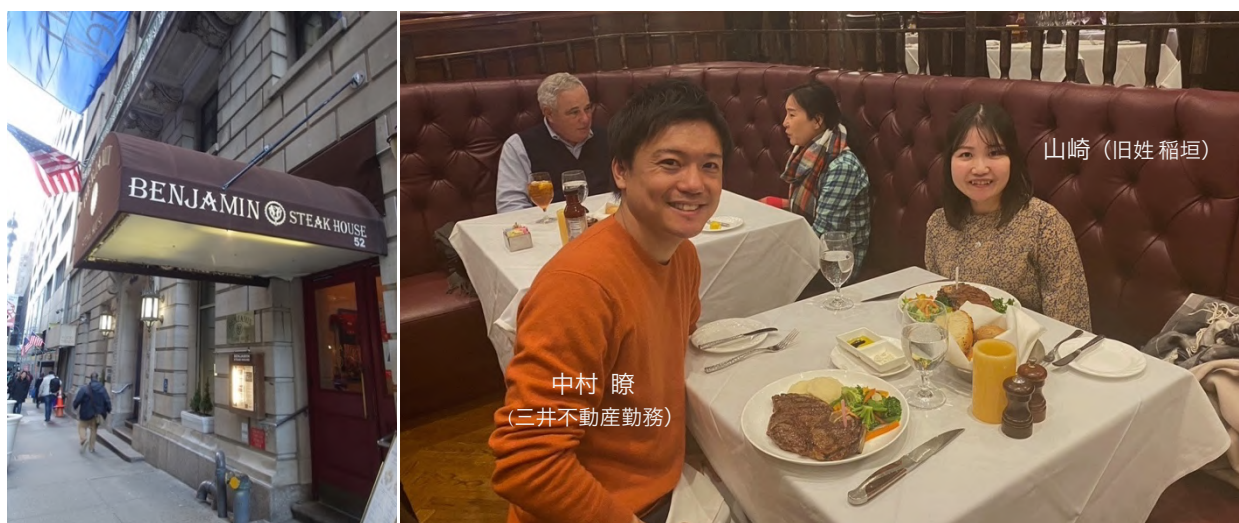
### ③ ナイアガラの滝

マンハッタンからは少し離れてしましますが、飛行機移動のツアーなどを利用すれば日帰りで行くことができるので、ニューヨーク旅行の最中に行かれる方もいらっしゃいます。雑な言い方になってしましますが、大きなものを見るとか、大自然を感じるって良いです。言葉にできない良さがあります（語彙力不足ですみません）。日本ではできない体験になるはずですので、行かれたことのない方にはぜひおすすめしたいです。



#### ④ ベンジャミン ステーキハウス プライム

ニューヨークには様々な人種、出身国の方がいらっしゃるので、レストランの種類も本当に豊富です。アメリカンフードだけではなく、イタリアン、スパニッシュ、中華、和食、トルコ料理など何でもあります。とはいえ有名なのはステーキ。少しお値段はしますが、せっかくアメリカに来たのであれば本場のステーキを召し上がってみるのもおすすめです。写真は、会社のオフィスビルが同じで家も近所の同期、中村さんと。



#### ⑤ クリスマスシーズンの五番街

時期の話になってしまいますが、クリスマスシーズン（12月頭～）のニューヨークはかなりおすすめです。ハイブランド店舗が並ぶ五番街は、各店舗のイルミネーションが凝っていて歩くだけで楽しいですし、ロックフェラーセンターのツリーも、とても美しく見応え抜群です。



私の一番のおすすめは Radio City で見られる「クリスマス スペクタキュラー」で、先日初めて観賞したときには本当に感動して2〜3日幸せな気持ちでいっぱいになりました。数十人のきれいなお姉さんたちが息をぴったり合わせたダンスを披露してくれるのですが、演出にニューヨーク要素を随所に散りばめてくれているのでニューヨークのクリスマスを過ごしている！という気持ちにさせてくれます。



以上、私のニューヨークおすすめ観光スポットでした。最近では、日本とアメリカの行き来もかなりしやすくなってきましたので、ぜひ旅行先の候補にご検討ください！最後にニューヨークでのカタールW杯の様子について少し書きたいと思います。日本と違い、住んでいる人たちの出身国、すなわち応援する国が異なるニューヨークでは、一致団結で観戦！応援！という雰囲気ではありませんでしたが、タイムズスクエアの電光掲示板に試合結果が流れていたり、それなりに盛り上がっている印象でした。もちろん他社の方含めニューヨーク駐在の日本人は大盛り上がりでしたが、勤務時間中の試合が多かったので、仕事を調整しながら（仕事をしながら？笑）、時にはオフィスでみんなで観戦していました。夜更かしや早起きをして観戦していた日本在住の方たちとは、また違った楽しみ方していたように思います。



## 🏆 香港でのバルサ生活

小泉 武広 (平 28 卒) FC Barcelona



昨 2021 年の 12 月に FC Barcelona に入社してから 1 年が経ちました。私は日本マーケットでの売上を最大化させることをミッションとしており新規、既存のスポンサーとの契約交渉が業務の大半を占めています。最近ではミツカンのグルテンフリーブランド、ZENB が新規のスポンサーとして加わりました。

→ 参照：日経新聞 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOQFD0486Q0U2A101C2000000/>

FC Barcelona は日本文化との親和性が高いと考えています。

一つは教育と価値観。ガビ、ブスケツ、イニエスタ、シャビ、メッシ等、バルサの下部組織で育った選手と他クラブのスター選手を比較すると、良い意味でスターらしくない、日本人に似た価値観を感じると思います。これはバルサが大切にしている HEART Value を体現することを小学生の時から教育されているからです。H は Humility (謙遜) E は Effort (努力) A は Ambition (野心) R は Respect (尊敬) T は Teamwork (チームワーク)。

二つ目は美学を貫く職人気質。

バルサでは、「スタイルを貫かずに勝つよりも自分たちのパスサッカーを貫いて負けた方がましだ」というメンタリティがあります。グアルディオラやシャビが同様のことを語るのを聞いたことがあるのではないのでしょうか。これは自分たちの伝統に誇りを持ち、代々継承されてきた技術を磨き続ける日本の職人気質と共鳴する価値観だと思います。負けてもスタイルを変えるのではなく匠の域まで技術を磨き続ける。そして貫く。敗者の美学という言葉が日本にあるように、結果がどうであれ、意志や価値観を貫くことが美しいという考え方が根底にあるように感じます。今後バルサのプレゼンスを高めていくにあたって、上記のストーリーを伝え、文化的親和性が高い企業と協働していきます。ちなみに ZENB にアプローチしたのは職人気質を体現するブランドだからです。(パスタがとても美味しいので食べてみてください。グルテンフリー、高タンパク、ミネラル豊富です)

私が昨年 7 月に赴任したバルサの香港オフィスは現在 12 名前後です。

入れ替わりが激しいので数ヶ月後にはまた変わるでしょうが、社員の国籍はアメリカ、スペイン、日本、韓国、中国、台湾、香港、モンゴル、インドネシアと多様性に富んだ構成になっています。嬉しいことに日本文化が好きな社員が多く、20~30 代の社員はドラえもん、クレヨンしんちゃん、ちびまる子ちゃん、コナン、スラムダンク等を見て育ったと聞き、日本文化の影響力の大きさを感じています。ちなみに一番漫画に詳しい同い年のインドネシア人の同僚によると、コボちゃんの作者である植田まさしの「かりあげクン」が一番の名作だそうです。



プライベートでは日本人のみで構成されているサッカーチームに入り、1ヶ月ほど香港の1部リーグでプレーしていました。過去形なのは、リーグ戦の第2節で左足首を骨折し2ヶ月間歩けず家に引きこもっていたからです。まさか初めて救急車に乗るのが香港になるとは思いませんでした。4日間入院しましたが、英語が通じる医者が少なく、コロナ感染対策なのか病棟から出ることができず、スマホの充電ができなため会社と連絡が取れず、散々な目に遭いました。特に病院に松葉杖の在庫がないからお前を退院させることができないと言われたときは香港が嫌になりました。笑

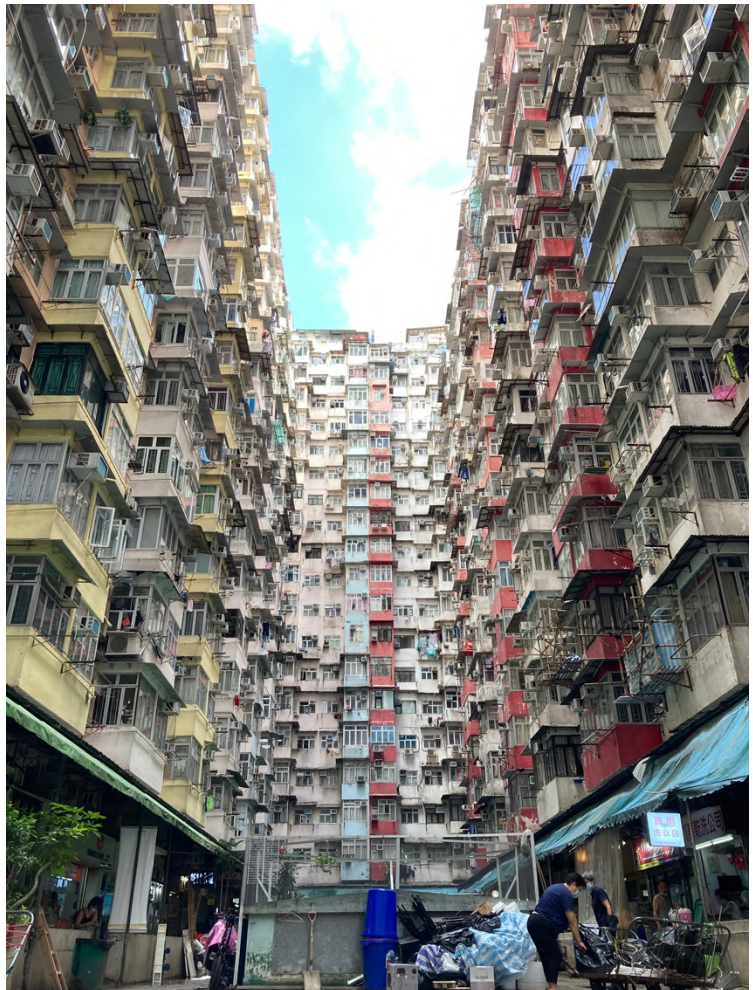
ただバルサの同僚の優しさに助けられました。

ある同僚はシャワー室で使う滑り止めと椅子が必要だろうと考えて家まで届けてくれたり、ある日は香港オフィスの全員が私の家の前のレストランまで来て一緒に食事をしてくれたり。彼らの口だけではない、本当の優しさに感動しました。バルサの香港オフィスでは、それぞれが苦勞してここまで来たからこそお互いに対するリスペクトがあり、苦しみを理解しあえる感覚があります。人と人とを結びつけるのは言語や文化、国籍や生まれ育ちではなく価値観なのだ、それが2022年一番の学びであったように思います。



上) オフィス入り口。毎日目にするがその度に気持ちが高ぶる。

右) 東京都の半分の大きさに100万人が住む香港は高層マンションが立ち並ぶ。地震があれば崩れそうな古い建物ばかり。



最後にもう1つ、価値観についての話を。

W杯、とても盛り上がりましたね。誰もが予想した真逆の結果だったのではないのでしょうか。当然社内でも日々話題となっていました。香港オフィスの同僚はアジアの国を応援し、バルセロナオフィスはスペイン代表ではなく所属選手とメッシの活躍だけを気にしていました。カタルーニャ人はスペイン代表に興味がないのです。

社内では大会前から日本代表は良い選手が多く、強豪と善戦できるレベルだという評価でした。ドイツ戦後は、キャプテン翼の漫画内で日本がドイツに勝つシーン、現実がついに漫画に追いついたことが話題になりました。スペイン戦後は日本代表の話題で持ちきりでした。日本人はなぜチームのためにあそこまで頑張れるのか、個々のエゴを全く見せず、For the team の精神がすごいと。

それでも一番反響が大きかったのは、クロアチア戦後に森保監督がファンにお辞儀をしたことです。日本人の感覚からすると普通のことですが、外国人にとっては日本を象徴する場面のように。同僚からたくさんの質問を受けました。「あの場面に美しいものを感じるが、理解ができないから説明してくれ」と。「なぜ負けた後にお辞儀をするのか」と。その時に敗者の美学の話をしました。「バルサがたとえ負けても自分たちの美しいサッカースタイルを貫くことが大事のように、日本人にとっては自分たちが美しいと感じる価値観を貫くのが結果よりも大事なのだ」と。「あのお辞儀は謝罪ではなく、サポーターへの感謝や国を代表する者としてのプライドがお辞儀として表現されたのだと思う」と答えました。カタルーニャ人とアジア人は理解してくれましたが、ヒーロー称賛の国から来たアメリカ人だけは理解できないと言っていました。笑

中国人の上司は私の話を聞いて、NHKのドキュメンタリー「ロストフの14秒」の話をしました。下記のYouTubeを見たようですが、敗戦を真剣に受け止めて、代表選手たちが申し訳なさそうに試合を振り返る姿に感銘を受けたとのこと。敗戦後もチームの一員として責任を全うする姿こそ敗者の美学、日本人らしさだ」と言っていました。動画の冒頭を見ると分かりますが、中国国内ではロシアW杯での敗戦を真剣に反省し、改善策を考え、実行したことが、今回のW杯での日本代表の飛躍に繋がったというストーリーで報道されていたようです。

→ 参照：ロストフの14秒 <https://youtu.be/9Q8vLqZcvT4>

バルサに入社してから、自分が日本人であることを誇らしく思うようになりました。社内の誰もが日本に対してリスペクトがあり、日本人というだけで好意的に接してもらっていると感じることもあります。バルサと日本文化の親和性のことを上記しましたが、日本人らしく振る舞うことが社内での働きやすさにも繋がっているように感じます。ただ香港オフィス内では「Takeは日本人ではない。納得いかない相手は誰であれNoと言うし、バルサにとって良いと思ったことは担当業務でなくとも全うする。あいつは血がBlaugrana（カタルーニャ語で青とエンジ、バルサのチームカラーを表す言葉）だ」といじられています。

ということで、今年はもう少し日本人らしさを体現することを目標にしたいと思います。  
それから、書きながら香港ネタが全くないことに気がついたので、香港を満喫することも。



自宅の屋上から。

7人制サッカーが人気なのか、ソサイチ用のクレイコートをよく見かける。

# 🏆 甦る！商大サッカー部の古写真

福本 浩 (昭52卒) 編集長



令和5年を迎えて間もない1月13日の夜、私の元に、こんなメールが届いた。

“初めまして、酉松会のホームページを偶然見つけ、ご連絡差し上げました。私の伯父に当たる人物が戦前の商大出身で、サッカー部に所属していたようです。現在家族の古いアルバムの写真の修復をしており、伯父のアルバムの中にサッカー部の写真を見つけました(昭和13-17年?) そのうちの1枚は酉松会のページ「発掘！戦前のサッカー部の写真」にあった写真と同じでした 甲子園で行われたらしい大学選手権のハーフタイムの写真や、紀元2602年(1942年/昭和17年)の選手章もありました。現在まさに修復中なので合計何点になるかわからないのですが、酉松会の資料編纂のお役に立てるようでしたらご一報ください”



→ 参照：酉松会 Website <http://www.yushokaishimbun.com/?p=1061>

メールをくださったのは、山田 あきこさん。彼女の伯父の名前は、山田 久寧(ひさやす)。部誌『蹴球』四号(1937)の名簿を見ると、確かにその名があった！(以下、山田先輩と記す)しかも、私の出身高校の大先輩でもあったのだ。何という不思議な縁か！

- \*入部 : 昭和12年(1937)
- \*出身高校: 宇都宮中(現栃木県立宇都宮高校)
- \*現住所: 一橋寮
- \*帰省先: 福岡県小倉市上富野



あきこさんによれば、ご先祖は愛媛の武家。

祖父（山田先輩の父）の代から東京に住んでいたが、陸軍将校だった祖父は“ありえないレベルの転勤族”だったので子供たちは小学校だけで3回か4回変わっているという。そして伯父（山田先輩）が中学入学のタイミングで赴任したのが、栃木県の宇都宮。その後、祖父は福岡県の小倉に転任したが、伯父はすでに高学年になっていたので転校せず、宇都宮中学から大学を受験したのではないかと推測している。山田先輩は上記『蹴球』四号に入部の動機をこう綴っている。（原文ママ）

“大分時期を過ぎた頃誰の推めでもないのにヒョッコリと入部した。七月の語學試験も過ぎた頃寮生慰安として寮對抗の試合があった。この時僕はルールも何も知らないのにハーフとして加はった。で真夏の暑い頃汗を流してグラウンドを走り廻る快味を始めて知った。何とその壮なる事よ。何とその男性的なる事よ。一度その力を知った僕は日一日とサッカー戀しの思ひを、募らせるだけだった。折も折父に「體を丈夫にしろ。ヒョロヒョロの體では實社會の落伍者だぞ」と云はれて益々サッカーに対する愛戀の情に拍車を加へた。かくて僕は入部した。本科へ進んでからの激的な勉學に且つ實社會へ行つてから最後の勝者たるに堪へる體格を作らんが爲に”

実は、あきこさんはグラフィックデザイナー。

忙しいお仕事の合間を縫いながら、古ぼけた写真を一枚一枚丁寧に修復して送ってくださった。まずは酉松会のページにあったものと同じ写真。裏に山田先輩が記したキャプションがあり、撮影時期や何の写真かがわかる。これが本当にありがたい。



修正された写真は驚くほど鮮明で、拡大すると、当時の部員たちの表情、ボロボロの練習着にシューズ、かなり歪んだ皮製のボールまでもが、生き生きとよみがえっている。



こちらは昭和13年に小平の部室前で撮影された写真。関東2部リーグで優勝し、1部に昇格した年で、何の大会かは不明だが、たくさんのカップを誇らしげに持っている。



よく見ると、窓の棧に「サッカー」の白い文字が！ 部室名を表示したものだと思うが、それが「蹴球」ではないことが興味深い。ごく自然に「サッカー部」と呼んでいたのだろう。85年も前の部員たちなのに急に親しみが湧いてくる。お〜い！と声をかけたくなる。



次の2枚は、昭和14年11月に、こちらもサッカー部室の前で撮られた写真。草ぼうぼうの空き地が部室の目の前にある。これがヒントになり、長年の疑問が判明した。当時のサッカー部室は小平予科分校のどこにあったのか、という疑問である。







山田先輩のアルバムには、今に続く伝統の「三商大戦」の写真もあった。  
昭和15年12月25日、対神戸商業大学戦のハーフタイムとグラウンドでの集合写真。



『蹴球』八号の戦績を見ると、試合は前半2-2、後半1-1の引き分けで、“前半強風下の爲押され気味 後半押しまくり チャンス多きも決まらず”とある。写真の選手たちや観戦に来たOB?もみんな暗い表情で、納得がいかない試合だったようだ。「甲子園」とあるが、野球の球場ではなく「甲子園南運動場」のこと。関西屈指の芝生のグラウンドだった。



→ 参照：甲子園南運動場  
[http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story\\_id=187](http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=187)



翌 12 月 26 日には神戸三宮駅の近くにある「東遊園地」のグラウンドで大阪商科大学と対戦。  
 下の写真は試合後に遊園地で撮ったもの。神商大に引き分けて奮起したのか、9-2 で大勝した。  
 ただし、『蹴球』の戦績ではそうなっているが、写真の裏の山田メモは、“11-1 で勝つ”。  
 どちらを信用すべきだろうか（笑） → 参照：東遊園地 <http://eastpark.jp>



昭和 16 年 12 月、日本は太平洋戦争に突入。  
 次第に戦時色が強まる中、翌 17 年には大学の卒業が 9 月に繰り上げとなり、それに伴って、  
 毎年秋に行われていたリーグ戦が春に実施することになった。そのリーグ戦の「選手章」も  
 山田先輩は残っていた。これがあれば入場料は無料。ちなみに「2602」とは、初代神武天皇が  
 即位した年を元年とする明治政府が定めた暦で、昭和 17 年は「皇紀 2602 年」に当たる。



まさにこの年に最上級生となった山田先輩は、リーグ戦初出場を果たす。  
写真は5月23日に明治神宮外苑競技場で行われた、リーグ3戦目の対慶應大学。  
CKを蹴っている背番号7の選手が、山田先輩である。



しかし、この慶應戦、0-5で大敗。山田先輩は写真の裏に気持ちをこう綴っている。

“敵C.K. 3本のC.K.中 2本後半に決められる。ダラシない試合だった。慶応の澆刺に比して  
何といふ情けなさ。帝大戦から以後、落ち目になった商大。誰の罪でもない。皆で、苦境を乗り越らう。”

“俺は此の試合を最後にリーグ戦から退いた。

4月29日のリーグ第一戦対早稲田に(1-1/3-1)と勝った(不明)は未だに忘れられぬ。  
大学リーグ一部にレギュラーとして初陣。初めての神宮には余り補はれず。好セNDERリング。  
最後の一点は俺が中盤で拾って少し持込み左へ大きく廻すを永倉ペナルティラインから  
逆隅に鮮に決めたもの。一生忘れられない。”

山田先輩にとって最初で最後のリーグ戦は、初戦の早稲田には4-2で勝利したものの、  
第2戦の東大戦以降は3敗1分、リーグ最下位で関東2部から1部に降格、残念な結果で終わる。  
そして昭和17年9月、山田先輩は、6年間通い続けた小平のグラウンドを去った。

卒業後、どこかの時点で海軍に入隊。

『蹴球』9号の名簿には「呉局気付軍艦八雲」「横須賀局気付」「板橋部隊山田隊」などとある。  
軍艦八雲に乗務し日本沿岸の警備にあたったのかも知れない。そして・・・

『60年史』の名簿には、悲しいかな、「↑山田久寧 昭 20.12.26 (戦病死)」と記されているのみ。

下の写真は、昭和17年6月に小平グラウンドで卒業アルバム用に撮影されたものである。  
波乱の時代を生きた山田久寧先輩、そして同期の先輩方に、謹んで哀悼の意を捧げたい。  
なお、西松会 Website「沿革」に同タイトルの記事を掲載している。この西松会新聞の記事には  
載せきれなかった他の写真も多数アップしたので、そちらもご覧いただきたい。



# 戦いを終えて

## 令和4年度シーズン

2022

★主将：加藤紘基 (4) / GM：皆川 開 (4)

★最高学年：遠藤慎之介 / 長田 陸 / 海谷俊輔 / 佐藤由都 / 東明建志 / 澁谷亮佑 / 鈴木春平 / 福嶋謙志 / 堀 伊吹 / 宮津佑介 / 山本怜央



皆川・堀・福嶋・東明・加藤・山本・澁谷・海谷  
七海・宮津・佐藤・遠藤・鈴木・長田・岩元

### 【試合メンバー】

**FW** 長田 (4)・工藤 (3)・鈴木元 (3)・桑島 (2)

**HB** 鈴木春 (4)・皆川 (4)・佐藤由 (4)・渡邊直 (3)・木村航 (3)・小林尚 (3)・平賀 (1)

**BK** 加藤 (4)・東明 (4)・海谷 (4)・北河 (3)・小松 (3)・山崎惇 (2)・外池 (2)・羽根 (2)

**GK** 堀 (4)・杉田 (3)

【戦績】 東京2部：8位 9勝8敗3分

\*大学名は左から前期リーグの対戦順

	武蔵	都留文	東工大	成城	大東文化	東大	理科大	日大文理	ICU	都立大
前期	○3-2	○2-1	○2-1	○4-2	●0-1	●1-2	●0-3	●0-2	○3-0	●1-2
後期	△0-0	○7-0	○2-1	△2-2	●1-2	○1-0	●1-2	●1-3	○3-0	△0-0

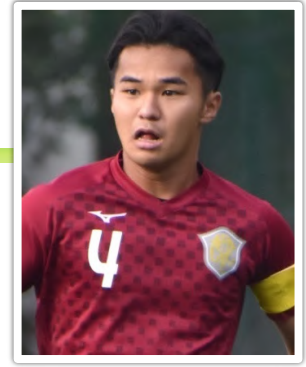
【東京都2部リーグ 最終順位表】

順位	大学	勝点	勝	分	負	得点	失点	差	
1	大東文化	57	19	0	1	56	11	45	
2	東大	43	13	4	3	43	14	29	
3	成城	37	12	1	7	60	38	22	
4	理科大	34	11	1	8	29	29	0	
5	武蔵	33	10	3	7	42	21	21	↑ 1部昇格
6	日大文理	33	11	0	9	32	38	-6	↓ 2部残留
7	都立大	32	9	5	6	44	26	18	
8	一橋	30	9	3	8	34	26	8	
9	ICU	11	3	2	15	16	63	-47	
10	東工大	8	2	2	16	18	53	-35	
11	都留文	1	0	1	19	15	70	-55	



## 🏆 悔しさと感謝が残った4年目

加藤 <sup>ひろき</sup> 紘基 (4年 DF 主将 / 神奈川・日本大学高)

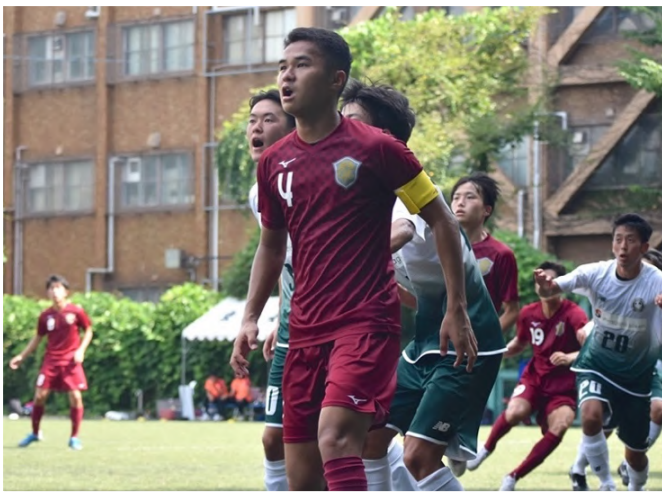


昨季の活動は、激動の1年であったと感じます。

まずは開幕までのプレシーズン。先輩方の引退と同時に、2年間指導してくださった戸田さんが退任されることが告げられ、自分たちが最高学年になる時点で、学生のみでの活動を知っていたのは自分たちだけとなりました。オフ期間から過去の自分たちの知見、2年間で戸田さんから得たものをもとに同期、後輩と話し合い、新しい組織体制や運営について考えるところから始め、オフが明けてからは試行錯誤を続けながらアップデートしていきました。競技面の方でもトレーニングや練習試合を経るごとに、自分たちが前進する感覚を持ちながら充実したプレシーズンを送ることができたと感じていました。

そして期待を胸に迎えた開幕戦。

相手は武蔵大学。自分たちよりも格上の相手に序盤から得点を重ね、結果は3-2で勝利。最高のスタートを切り、続く3試合も勝利し、開幕4連勝。うち2試合はロスタイムで決勝弾。うまくいきすぎていました。好調のムードが漂い、どこか油断していたのかもしれない。5試合目の相手は、リーグ首位の大東文化大学。相手をリスペクトしながらも自分たちの持てる力を発揮して、全力でぶつかるもセットプレー1本に泣き、0-1の敗戦。初めての負けが付いた後から、今度は逆にうまくいかない試合が続き、気がつけば4連敗。得点はなかなか奪えず、失点だけが増えていく。今までの自分たちの積み重ねが否定されてきたかと思うほど、苦しい期間でした。やっと1つ勝てたかと思えば、また負けが続き、主将としての情けなさ、不甲斐なさに悩まされる日々が続きました。



そんな憂さを晴らしてくれたのは夏の終わりの商東戦です。

いろいろな人の協力もあり、3年ぶりに有観客で試合が開催され、相手は東大。試合前の整列で観客席を見ると、相手よりもはるかに多い人数の一橋の観客席。4年間で一番燃える試合でした。個人的に反省すべき点は多く残った試合でしたが、何よりチームとして最後まで粘り強く、思考を止めずに戦う姿を足を運んでくださった方に見せられたこと、そして何より勝利する姿を見せられたことがうれしかったです。



夏の中断期間が明けた後は、また悔しい思いばかりすることになりました。

半分以上の試合を消化し、少しずつ順位による相手との関係性を意識する中で、近い相手との直接対決で勝ちきれない日々。個人的にも最後の1か月は腰を骨折し、プレーできない日々。ようやく戻れたのは最後の試合の後半15分。20試合を終え、チームとしての確かな成長を感じつつも、最終順位は8位。

ここまで書いたように、自分の気にし過ぎる性格も相まってか、

振り返ると悔しさや後悔ばかりを思い出してしまいます。4連勝している時に、もっと引き締めていけばな、負けが続いたときに軌道修正するためにもっとできることがあったんじゃないかな、あの試合の自分のプレーはもっとうまくやれたな、などなど挙げればきりがありません。

ただ自分がそれ以上に感じたことは、やはり支えてくれる人への感謝です。

自分たちがシーズンを通して成長できたのはOBや保護者、関係者の皆様の努力によって完成したリーグ最高峰のグラウンドで練習することができたおかげであり、公式戦においても、多くの人の声援が自分たちの力になることを商東戦で身をもって体感することができました。

(昨季の有観客の試合では無敗という記録が残っています)

自分が体感したようなサポートを、今度は自分が現役部員にしていくことが

後輩たちのためであり、自分がア式に残した後悔を唯一晴らす方法だと思うので、今季からは自分も後輩たちを支えていくことで恩返しをしていければと思います。最後になりますが、改めてこれまで4年間、ご支援、ご声援いただき、本当にありがとうございました。

これからもよろしくお祈りします。



## 🏆 「ア式」を紡いでいく

皆川 開<sup>かい</sup>（4年 DF GM / 東京・筑波大学附属駒場高）



一橋ア式蹴球部、我々現役部員の活動のために多大のご支援、ご声援をいただきました大勢の方々に対しまして、心より感謝申し上げます。今シーズン、数試合ではありますが有観客試合の開催も実現し、皆さまの前で試合を行うことが叶いました。特に駒沢競技場での東大との試合は私自身一生の宝物になると感じています。「何を成し遂げることができたか」、戦いを終えてア式を離れた今、自分について正直に振り返ってみても依然として答えを掴むことはできません。今シーズン、チームの成績は東京都2部リーグ8位と言っても昇格まで数ポイントの差でした。いや、数ポイント「も」差があったと言うべきかもしれません。優秀な後輩たちに1部という舞台を残すことはできませんでした。

戸田前監督が退任されて最初の年、非常に難しい1年でした。学生監督を置くなど形は変わっているにしろ、これまでと同様の「学生主体」の体制に戻すという決定をしたことで、唯一戸田さん以前の組織を経験している私たち4年の代は、自分たちしか知らないモノを後輩に伝えていく使命を果たす必要があると感じていました。しかし、文化や伝統を紡いでいくことは簡単ではありませんでした。ここ数年でア式蹴球部は大きく変わり、2つのカテゴリーは別の活動となり、部員の役割や活動は多岐にわたるようになりました。そんな中で「ア式らしさ」を掲げて新たな部員に従来のルールを全て守ってもらうことは正しいことなのか、幹部中心に議論を行う必要がありました。多様性を有する環境において全体主義を掲げることは非常に困難です。属性の異なる人たちの足並みを揃えようとする考え方ではルールも多様化してしまい、かえって細かいルールに縛られ意志ある行動が制限されてしまいます。逆に言えば、今の環境に従って学生が柔軟に、かつ合理的に行動し、各人の良さを発揮していくのが「ア式らしさ」であり、時代によって変わっていくのは当然であると考えようになりました。



今シーズン、結果だけを見れば確かに何も残せませんでした。  
 試合の中で弱々しい姿をお見せしてしまうこともありました。しかし、ア式を引退した今では、自分たちが部に与えた影響を信じ、後輩を信じて、たとえそれが小さな種だったとしても数年後、数十年後に大きな花を咲かせてくれることを祈り、応援するしかありません。今年、僕らのサッカーを見て「プレーが好き」「戦術が好き」と言ってくださる方々がいて、とても嬉しく大変励みになりました。現役部員には結果にも過程にもこだわりつつ、伸び伸びとプレーする姿を見せてくれることを切に願っています。「ア式らしさ」を探求すると同時に、「ア式らしさ」を体現できる存在が、カテゴリーに関わらず一人でも多く現れれば、ア式の未来は明るいとは僕は考えています。共に闘っていきましょう。

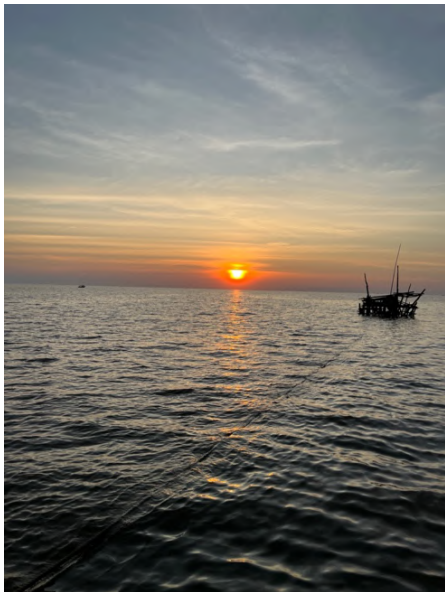


## 🏆 変化、それでもア式はア式。

遠藤 慎之助 (4年 DF / 東京学芸大学附属高)

初めに、OB・OGの皆さま、保護者の皆さま、そしてア式蹴球部に  
 関わる全ての皆さま、4年間ご支援・ご声援ありがとうございました。  
 最高の環境で4年間サッカーに取り組むことができ、とても幸せでした。  
 引退して4ヶ月、私は念願の東南アジア周遊バックパッカー旅を終え、この文章を書いています。  
 思えばア式に入部するか迷った唯一の懸念は気ままに海外旅行に行けないことでした。紀行文の中  
 でも著名な「深夜特急」やカンボジアを題材としたドキュメンタリー映画「僕たちは世界を  
 変えることができない」を幼少期に見て以来、東南アジアは僕の憧れの地であり続けました。

シエムリアップ・カンボジア



トンレサップ湖



現地の村で子どもたちとサッカー

引退後のバイトで何とか工面した30万円を持っていき、各地の安いドミトリーに泊まり、タイ→カンボジア（ポイペト）、カンボジア→ベトナム（ハティエン）、ベトナム→ラオス（ディエンビエンフー）、ラオス→タイ（ノンカイ）の4国境を陸路で越えました。ラオスの田舎でカードがATMに飲まれ、カンボジアでバイクのカギを失くすなどハプニングもありましたが、現地の人たちのエネルギーと各地で生き活きと暮らす日本人の方々に強く感化される旅でした。

フーコック・ベトナム



世界最長のケーブルカー

ヴィエンチャン・ラオス



中国雲南省とラオス首都を結ぶ中老鉄道駅

そんなア式と同じくらい熱意を持っていたはずの海外への旅行中でも、部のSNS投稿を見ては「楽しそうだな～、いいな～」と思ってしまいました。シムリアップのトンレサップ湖で見た夕日やベトナムの島で見た透き通る海と絶景と同じくらい、もしくはそれ以上に小平グラウンドや、そこで奮闘する後輩たちの姿を見ると心を動かされてしまいます。

この4年間、ア式蹴球部は様々な変化に直面しました。

コロナ、小平の人工芝化、戸田さん、練習のA B分け、スタッフ職の新設、組織改革と事業面の強化など、傍から見ると3年前と比べて全く違う部活のように思えてしまいます。自分自身、運営体制の変化やサッカー面での変化についていけず、戸惑っている時期もありました。しかしこの文章を書くにあたって改めて4年間を振り返ると、思い出すのは、なぜかくだらない日常の出来事ばかりでした。サッカーが下手くそだった私にとってピッチ内の出来事は、詳細に覚えておくに堪えない惨めな体験が多かったからかもしれません。

組織が直面した大きな変化とは対照的に、鮮明に思い出せる日々の出来事は、

この4年間で全然変わっておらず、思わず笑ってしまいます。郷土の森グラウンドで、2個上の先輩方が練習後ずっと帰らずボールを蹴っていた姿は、2022年にも小平の人工芝グラウンドで見られました。練習後は学年を問わず自転車の大群が「武：小平近くのうどん屋さん」や「満福：新小平駅前の中華」に向かい、支払いはジャンケンで決めました。

誕生日の人は部員みんなでお祝いし、祝われた人のお金で腹を満たし、暑い日には「モリオカ」（恐らく何期も上の先輩が考案されたリフティングゲーム / ルールは文末に後述）で、ジュースのおごりをかけて闘っていました。相変わらず単位が怪しい先輩は後輩を頼り、用具の準備や片付けで同期内でもめる姿が散見されました。

今年はやっと声出し応援ができるようになりました。コロナを経て、応援の熱量も以前よりは劣ってしまったかもしれませんが、応援の持つパワーや公式戦勝利後の包み込まれるような嬉しさは4年前、高校生の時に初めて見たvs 東大のリーグ戦そのままでした。下の写真は、東大戦後に感化されて翌日に学校をサボり、郷土の森グラウンドヘア式の練習の見学に行った時のものです。（後ろの3人は私と同じ学芸大附属高出身で3個上の先輩たち）



私は組織愛、熱狂感、ひたむきさに溢れたア式が本当に大好きで、たくさんのエネルギーをア式からもらいました。社会人生活にはどんな困難が待ち受けているか見当もつかないですが、「ア式の男」らしく気持ちを見せて恐れることなく戦っていきます。改めて、ア式に関わる全ての皆さま、4年間本当にお世話になりました。これからも一人のア式ファンとしてよろしく願いいたします。



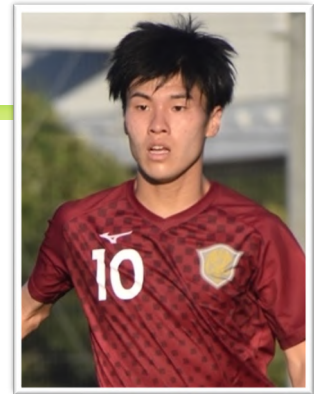
## 【補足：モリオカのルール】

- ① 数人で円になり、2タッチのリフティングでボールを時計回りに回していく。
- ② ボールを渡すときに前の人より1多い数字を発声する。
- ③ 「7」の倍数、そして「7」のつく数字の人は発声せず、逆方向にダイレクトでパスをする。
- ④ 誰かがリフティングやカウントをミスしたら、カウントは1から再スタート。
- ⑤ ゲーム開始時にライフ（=何回ミスしていいか）を決め、最初に亡くなった人が負け。

## 🏈 ア式生活の振り返り

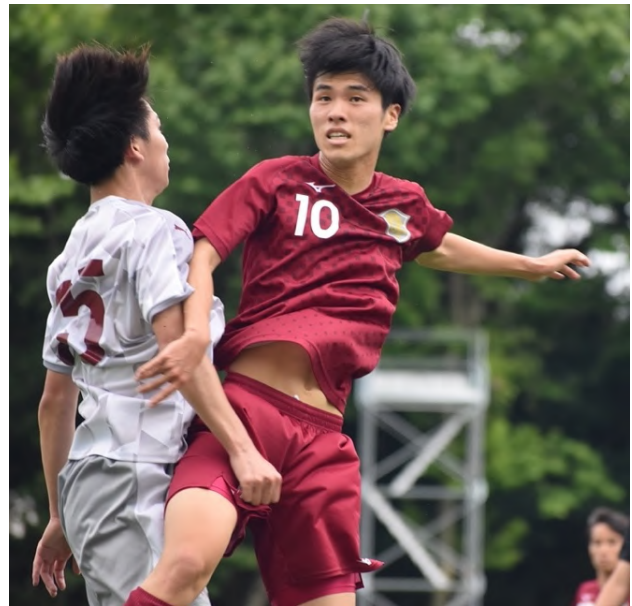
おさだ りく  
長田 陸（4年FW / 神奈川・桐蔭学園高）

まずは、この4年間、一部コロナで中断はありましたが、後半の2年間はとて綺麗なグラウンドで満足にサッカーができたことをOBの方々に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。ここでは、僕自身の大学生活がどのようなものであったかを振り返りたいと思います。



私がア式に入った理由は、組織の熱量がとても高く良い組織だと感じたからです。

その認識は入部してからも変わらず大学4年になるまで走り続けることができ、非常に多くの事を学び、見つけることができました。そのひとつが自分のモチベーションです。自分自身、必死になって活動できた理由は、この組織の仲間と素晴らしい感情を共有したいと思えたからです。特に同期とは非常に仲を深めることができ、多くの時間を過ごし、信頼関係を築くことができたと感じています。そのため社会人になってからも、そのような働き方ができる組織に所属したいと思い就職活動を行いました。現段階では納得のいく就活ができたと思っています。



さらに、この大学生活では自分自身大きく成長できたと感じています。

もちろん部活での経験が要因として大きいのですが、その他にも同期と旅行したこと、恋愛で経験したこと、後輩と遊んだこと、就職活動など、一橋大学だからこそ素晴らしい経験ができたと感じていて、高校生の時の自分に感謝したいです。その中でも、様々な場所に旅行に行けたことが大きいと思います。家族と共に小さい頃過ごしたブラジルへ行けたこと、同期とベトナムやヨーロッパに行けたこと、それぞれに大きな思い出があり、多くの文化を経験できたことや、それぞれの場所で感じたことは明確に今後の自分を作っていくものになると感じました。

ブラジルには父親の仕事の関係でサンパウロに1歳から5歳頃までいましたが、そこに再び行くことができました。小さい頃だったのであまり覚えていない場所も多かったですが、自分が通っていた幼稚園に入らせてもらうこともでき、幼い頃を思い出すことができました。良い街で良い人が多いと感じることもできました。社会人になってからも色々な場所に行って多くの経験を積みたいと思っています。

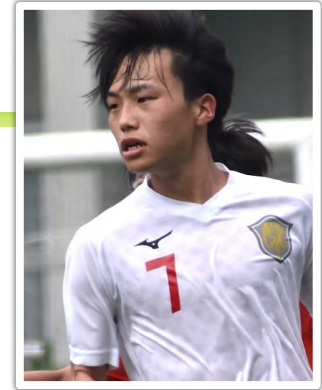
このように、多くの素晴らしい学びと、成長を得ることができた4年間でしたが、もっとやれることはあったのかもしれませんが。そういった多少の後悔のようなものを糧に、社会人生活も過ごしていきたいと思っています。4年間、本当にありがとうございました。

イグアスの滝・ブラジル



## ⚽ 成長できた4年間

佐藤 由都<sup>ゆうと</sup>（4年 MF / 神奈川・逗子開成高）



部活を引退して4か月が過ぎた。毎日、朝早くから小平グラウンドに行くこともなくなり、だらだらとした生活を過ごしている。4年生の頃は、早く引退して遊びたいなどと考えていたものの、サッカーのない日常は少し寂しいと感じる。

大学1年生の頃は、カテゴリーがA1、A2、B1、B2と分かれていた中で、自分はB1とB2を行き来する程度であった。リーグ戦で活躍するどころか、出場することも今年にはできないだろうと感じていた。毎週リーグ戦が開催され応援に行くも、あまり応援に身が入らずに、他人事のように捉えている自分がいた。また、ほとんど毎日バイトをしていたり、サッカーに対してあまり身が入っていなかった。

大学2年生の頃になると、新型コロナウイルス流行の影響で部活動が約半年間できなかつた。オンラインで筋力トレーニングやチーム全体で共有されたランニングメニューを各自でこなす日々が続いたが、8月からは部活動が再開され、私自身もAチームの練習に参加させてもらえた。新しく戸田さんが監督になり、チームの指導方針や求めるサッカースタイルが去年度とは全く異なるものになった。具体的には、個人技よりも集団でのプレーを大切にするスタイルに変化していったのである。私もビデオで自身の練習のプレーを振り返り、不明点があれば戸田監督に聞くようにして多くのことを吸収することができた。その甲斐あってか、リーグ戦の第1節にはベンチメンバーに入ることができた。



特に、この初めてとなるリーグ戦は印象に残っている。

対戦相手は成城大学、9月中頃で気温は30度を超える暑さ、会場は大宮けんぼグラウンドという天然芝のボコボコしたピッチで試合をした。PKを与えて先制され、0-1で前半を折り返す。

私自身は後半途中から出場し、アシストを記録して試合は1-1の引き分けに終わった。

初めてリーグ戦に出場し活躍したこの時の高揚感、言葉では言い表せないような満たされた感覚は今でも覚えている。1年前まではリーグ戦に出場することも思っていなかったなので、びっくりした。

戸田監督からサッカー一面に関して学んだことは多く、成長できたと感じている。

ボランチという中盤でプレーすることが多かった私は、もともと内向的な性格であり、小中高とサッカーをしてきて試合中に声を出すことはほとんどなかったのだが、戸田監督のおかげで声を出して指示することの重要性、ボールを持っていないオフザボールの時にどのような動きをするか、チームの集団と連動するための攻守におけるプレー原則など、私自身知らなかったことを数多く吸収することができた。最後になりますが、OB、保護者、関係者の方々の支えがあって、活動ができたと感じております。本当にありがとうございました。

## 🏈 棚から牡丹餅

しのあき たけし  
東明 健志 (4年 DF / 東京・攻玉社高)



今一度、ア式での4年間を振り返ります。

1年生の頃の記憶として鮮明に覚えているのは、シーズン初戦の玉川大学との試合でした。応援席から観戦していたのですが、

そのスピード、球際の激しさ、勝負に懸ける熱量に圧倒されたのを

覚えています。自分もそこでプレーしてみたいと感じると同時に、大学サッカーのレベルの高さを痛感しました。当時まだ土だった小平グラウンドでの練習は、今ではいい思い出です。

ボールは跳ねるし、捻挫はするし、服は汚れるし、大変なことも多かったですが、練習前に同期とトンボをしたり、コートを作ったり、大量のゴザを運んだりするのは案外楽しいものでした。



土の小平グラウンド 2020. 2.15



公式戦には長らく絡めずにいましたが、新人戦で転機を迎えました。

初戦の成蹊大学との試合で初めて公式戦に出場したのです。0-1の状況で、「とりあえず試合を落ち着かせてこい」との指示を受けグラウンドに投入されましたが、全く役割を果たせず、試合にも入れないまま終わってしまい、苦いデビュー戦となりました。2試合目は、同期の佐藤が英語の試験の追試のため試合に出られなくなり、彼の代わりとしてスタメンに選ばれました。自分ではここがア式人生の転換点であると思っているので、彼には頭が上がりません。加えて出場機会を与えてくれた、当時指揮を取っていた七條さんにも同じく感謝しています。

2年生のシーズンでは初戦からリーグ戦のスタメンとして出場できました。

しかし、実はこの時もスタメンの予定であった阿部さんの怪我により、代わりとしてチャンスを得ました。結果としては不甲斐ない出来に終わり、そこからシーズン通して試合に絡む機会は少ないものとなりました。

3年生、4年生のシーズンでは多くの試合に出場することができ、選手として人として本当に価値ある経験をすることができました。結果を出すことの難しさ、そして、最終的に結果を出す者が普段からどのような想い、姿勢で取り組んでいるのかを、多くのチームメイトから学びました。それは高校時代には得られなかったものであり、大学サッカーを通じて獲得できた大きな財産です。

チャンスの掴み方は幸運としか言いようのないものでしたが、そのチャンスを大きくできたのは間違いなく自身の成果であると思います。自らチャンスを掴み取ることと同じくらいに、与えられたチャンスをものにもすることも大切であることを学びました。それは4月からの仕事にも通ずるところが必ずあると思うので、ア式での経験を活かして社会人として精進したいです。4年間を通して支えてくださった全ての方々への感謝の言葉を本記事の締め言葉とさせていただきます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



## 🏆 「学生主体」について考え直す

澁谷 亮佑<sup>りょうすけ</sup>（4年DF / 神奈川・柏陽高）



私のポジションはサイドバックかセンターバック、事業面では、プロモーション部長を務め、特に新歓活動を担当しておりました。ア式での生活を過ごしていく中で良くも悪くも付きまとい離れることがなかった「学生主体」に関して、自分の考えを述べたいと思います。

「学生主体」・・・この言葉は、明確な定義付けがされていないがゆえに、様々な解釈をすることができるし、事あるたびに、その定義について話し合いが行われた。ここで言う定義とは、「学生が主体的に考えて行動する」というような辞書的な大まかなものではなく、「誰が見ても理解の相違が生じないレベルに定められたもの」という意味合いである。

「学生主体」を「学生」と「主体」に分割して考えるとすれば、「学生＝一橋大学ア式蹴球部の部員」であることは明らかだが、「主体」に関しては、様々な解釈が生じる可能性がある。ある人からすれば、“学生だけ”で責任をもって部活動を運営することであるかもしれないし、またある人からすれば、あくまで学生が最終的な意思決定をするならば、そこまでのプロセスに部員以外の人に関わっていても構わないと考えるかもしれない。自分たちで謳っているものであり、その定義付けがされていないのだから、明確な正解はない。

現役部員であったときの私は、この答えのない議論に退屈すら感じていた。これまでの議論で明確な定義付けがされた覚えはないし、不毛だったかもしれない。例外的な事象が発生するたびに、都合よく解釈が変更されてきたようなものだ。しかし引退した今考え直せば、「学生主体」は、その意味合いについて考えること、それ自体に意味があったのかもしれないと思う。「学生主体」の意味を考え直したことが、自分たちの部活動が何たるかを考えるきっかけを与え、自分たちを見つめ直す機会になったことは間違いない。私は、この、「学生主体」というア式の考えは、考えることそれ自体に意味があるし、大切な命題として、これまでア式に存在し続けてきたものなのではないかと思う。

「学生主体」の考えが、いつからア式にあるのかは分からない。当初は、もっと違う意味合いを持ったものだったものかもしれない。それでも、「学生主体」はア式にとって自分たちの原点を見つめ直すきっかけを与えてくれる重要な考えであり、これからも大切にしたい言葉である。

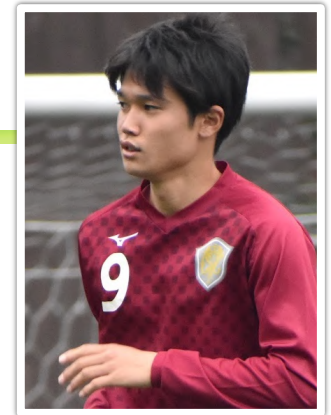
引退した今だからこそ思う素直な思いをここに書き記しておきます。  
最後までお読みいただきありがとうございました



## 🏈 失敗の日々

鈴木 春平 しゅんぺい (4年FW / 茨城・水戸第一高)

OB・OG・保護者の方をはじめ、一橋大学ア式蹴球部に携わってくださった方々に心より感謝致します。コロナ蔓延という未曾有の危機にもかかわらず4年間プレーできたことで人生の財産とも言える時間を過ごせました。本当にありがとうございました。



自分の4年間を振り返ると「失敗」の2文字がぼんやりと浮かんできます。

思い返せば、1年生の頃に先輩から「おまえは2択で絶対に間違った選択肢を選ぶ」と言われたのは鮮明に覚えています。ただ、ア式での活動を通して「失敗」に対して受身をとって立ち上がり、1歩でも多く前進する力を培えたのもまた「失敗」のおかげだと感じています。

忘れもしない2021年10月17日の創価大戦。

朝から10月とは思えない寒さと激しい雨で、ピッチコンディションは最悪とも言える程だった。前々節と前節のリーグ1位2位との2連戦で手応えを感じていた自分にとって、ピッチ状況や自チームの雰囲気など眼中になく、自分が出場して活躍するだけ、そんな浅はかな考えの下、後半開始からピッチに立った。笛が鳴った直後、身体が思うように動かなかった。視野が狭まり、イメージがまとまらない、ボールコントロールがずれ、気がついたら交代させられていた。その時、「失敗」が自分を包み込んだ。

戸田さんは何度も「プロセス」の重要性を皆に説き、サッカーに対する本物のメンタリティを我々に植え付けようとしていました。それはプロを目指すわけでもなくアマチュアで続けている我々にとって、獲得するには困難なものでした。練習の入りのジョグ、ストレッチ、ファーストタッチ、ほんの一瞬にどれだけ人生をかけられるかを常に考えるようになりました。少しでも気を抜くと「途中出場、途中交代」という恥ずべき過去が追ってくるからです。



2022年シーズンも失敗ばかりで後味の悪い引退となりましたが、今後の人生でも10月17日を忘れることはないでしょう。ア式でなくとも経験できることは山のようにあるかもしれませんが、ア式でしか経験できないことは、それ以上に膨大であり偉大なものでした。ともに歩んでくれた先輩・同期・後輩との日々は紛れもなく「成功」の2文字です。

## 🏆 最高のア式生活

けんし  
福嶋 謙志 (4年DF / 東京・西高)

まず始めに、OB・OG・保護者の皆様、4年間多大なるご支援とご声援をありがとうございました。おかげさまで最高のア式生活を過ごすことができました。こういったところが最高だったかということ、大きく2点あります。

ひとつは、今までで一番辛い経験ができたことです。僕が2年生になってすぐくらいの頃に、戸田さんがチームの練習を見に来ることになりました。戸田さんが教えてくれるサッカーは、僕が今までやってきたサッカーとは全くの別物でした。特に最初の頃は全くついていけずにチームの足を引っ張りまくり、自分のできなさ、不甲斐なさに失望し続ける日々でした。それでも何とか食らいついて、運も味方につけてですが、3年次の創価大戦でリーグ戦に出場することができました。ア式のみんながめっちゃくちゃあったかくて、泣きそうなくらい嬉しかったのを今でも覚えています。



もうひとつは、最高の仲間と出会えたことです。

正直、1年・2年の頃はアシキのことがあまり好きじゃありませんでした。それは主に自分自身に原因があったと思ってはいるのですが、何となく居心地の悪さ、息苦しさみたいなものを感じていました。それが皆と時間を共にするにつれて段々と薄れていき、いつの間にか皆の存在こそが僕がア式に居続けるひとつの理由になっていました。全くうまくいかない時期も皆がいたから乗り越えられたし、引退してもなお皆のことが大好きです。本当に素敵な経験をさせてもらったと心の底から感謝していますし、これから先の人生においてもア式で得た財産を大切にします。



## ⚽ ア式4年間を振り返って

いぶき  
堀 伊吹（4年 GK / 東京・立川高）

ア式に入ってもう4年間が過ぎようとしています。正直早すぎます。入部してからちょうど1年後に新型コロナウイルスが流行拡大したことも早く感じる要因にあるのかなと思います。自分たちの代は良くも悪くも新型コロナウイルスに振り回された代だと思います。

流行し始めた2年生以降はオンライン授業が主体となり、キャンパスに行く機会が極端に減りました。自分は3年で単位を取り切ること成功したため2年生以降、対面授業を取ることはなく、今年キャンパスに足を踏み入れたのは卒論製本と卒論提出の2回だけです。卒業式を合わせると1年間で3回の登校ですね。そのため、通常あるはずのクラスの友人とのキャンパスでの横のつながりが希薄になりました。こういった環境で、ア式の中でのつながりがより密接になり重要度を増していたと思います。



大学に入学した当初は、どの体育会にも入るつもりがなくサッカーサークルに入って楽しい大学生活を謳歌しようと考えていました。ア式蹴球部を知るきっかけになったのは、高校サッカー部の先輩である戸田知輝くんがア式に入部していたことです。先輩の誘いで体験入部に行き考えが変わり始めました。それまで大学の体育会サッカー部はとて上下関係が厳しく、ピリピリとした雰囲気があるものばかり思っていました。しかしア式では、3個上の先輩方をはじめとして心地よいアットホームな雰囲気があり、とてもなじみやすかったのを覚えています。「良い結果は良い関係性から」という言葉がよく似合うチームでした。特に、体験入部の際から同じGKの先輩として温かく迎え入れてくださった、ひでさん（中野英司）と、ばたけさん（北畠大暉）の2人がいなければア式に入っていなかったと思います。入部してからは高校サッカーと大学サッカーのレベルの違いに驚きながらも、小平の環境は高校のグラウンドよりも劣悪ではないかと思いつつ日々一生懸命練習に励んでいました。

2年になり、元日本代表の戸田和幸さんが指導者として関わってくださることになりました。ア式の日々の中で新型コロナウイルス流行と同規模の転換点であると思います。自分もサッカーに対する考え方やGKに対する考え方が変わりました。今までやってきたサッカーは狭い範囲で行っていたもので、何も考えずに行っていたのだな、サッカーというのは、GKというのはこんなにも奥が深いのか、もっと早く知りたかった、いろいろな感情がありました。もちろんサッカーに対する知見が広まることは良いことですが、すべてが楽しいことばかりではありません。自分のサッカー生活の中で1番つらい時期でもあったと思います。ただ1つ言えるのは、サッカー人生で一番真剣になれた時でもありました。



戸田和幸 前監督

これまでのア式の4年間を振り返ってみると人との出会いが転機になっていると思います。戸田くんをきっかけに体験に行き、ひでさん、ばたけさんをきっかけに入部。そして戸田さんとの出会いをきっかけに、よりサッカーに真剣に取り組むようになりました。このように、素晴らしい出会いに恵まれてこの4年間があったと思います。これからも出会いを大切にしつつ社会人生活を歩んでいきたいと思っています。

## ⚽ ア式4年間を振り返って

みやつ ゆうすけ  
宮津 佑介 (4年 MF / 東京学芸大学附属国際中等教育学校)



今まで自分が所属してきたチームとのレベルの差を感じながらも、このチームで活躍できるようになれば長く続けてきた競技サッカー人生の締めくくりとして最高だ、何となくだが、そんな思いで入部したことを覚えている。しかし大学サッカーのレベルは高く、入部して2年近くは本当に何もできなかった。負け続けるBチームの中でもかなり下手な方。怪我でプレーできない期間も多く、埋めるはずだった周りとの差は広がる一方で自分のプレーに限界を感じ、一度は辞めることを申し出た。

それでも結果的に続けて迎えた3年目は、自分にとって転機と言える年だった。

丁寧にリハビリをしたことで体の動きが良くなったこと、チームとして取り組んできた戦術面のトレーニングが身を結び出したこと、前向きに思い切り良くプレーできたこと、様々なことが重なって、自分の中でベストと言えるパフォーマンスが出せた。大学サッカーでも通用すると3年目に初めて実感でき、自分が信じてやってきたことは間違っていなかったと感じた。

Bチームとしても、前年ほとんど負けていなかった中で

同じような相手に勝てるようになっていた。戸田さんが体系化されたプレスやビルドアップの戦術をチームに持ち込み、学生スタッフが時間をかけてチームに落とし込んでくれた成果が出ていた。負けるのが当たり前になっていた自分たちにとって非常に大きな勝利だったし、逆襲のような感覚もあった。自分もその一部としてチームに貢献できていた。個々の能力で劣っていても勝てるという成功体験を共有していたのは自分だけではなかったと思う。



プレーすることを想像すらできなかったリーグ戦がついに射程圏内に入ったと感じて、4年目を迎えた。自分のベストなパフォーマンスを出し続けることができれば、チャンスはきっと来ると確信していた。しかし結果的には、自分の弱さを痛感する1年となる。Aチームに上がり、さあチャンスがやってきたというところで調子は下がっていった。悪い状態からなかなか脱することができず、ベンチ入りすらできなかった。積み上げてきたものの脆さと踏ん張りの弱さを感じて、今でも正直情けなく思う。チーム運営においても、状態が悪い時に何とかしようと日々できることをしたが自分の力の弱さを感じた。

ア式での4年間を振り返ると、自分は間違いなく成長できたと誇りに思う。一度は完全に諦めたことが実現可能だということを認識できたことは、自分にとって大きな自信になった。周りの期待も自分の期待も超えることは可能だと今の自分は信じられる。しかし同時に、それを完遂できなかった自分の弱さに悔しさと情けなさも感じてしまう。この悔しさは、今後の人生で返していくしかない。あの時の悔しさがあるから今の自分がある、胸を張ってそう言えるように懸命に生きようと思う。ア式での4年間で、素晴らしい仲間と、代え難い貴重な経験を得ることができました。OB・OG、保護者、他にも関わっていただいた全ての皆さん、日々の活動を支えていただき、本当にありがとうございました。

## 🏆 ア式4年間を振り返って

山本 怜央<sup>れお</sup>（4年DF / 神奈川・光陵高）

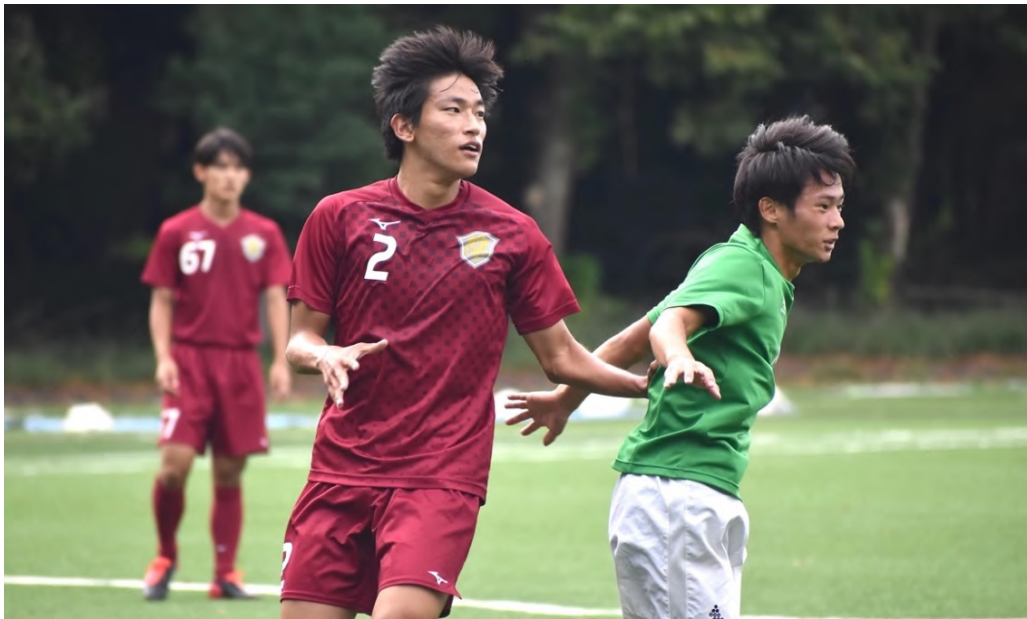
大学の部活動での思い出は、2度昇格することのできたAチームでの活動期間です。僕は4年間のア式生活のほとんどをBチームで過ごしチームに何かをもたらすことはありませんでした。そんな僕にも2度チャンスは巡ってきました。



一度目は大学3年の6月頃、突然明日からAチームの練習に参加してくれと連絡が来ました。まさか昇格できるとは思っていなかったので、すごく舞い上がりました。そして週末のリーグ戦で、出場こそなかったものの初のベンチ入り。翌週のリーグ戦では、たったの2分ですが、初出場を果たしました。練習にもある程度ついていけている感覚があり、少しずつ自信を深めていた中、迎えた玉川大学とのリーグ戦。ラスト10分くらいで声がかかり、初めてまともなプレー時間を与えられて出場しました。しかし、僕はミスを連発。試合も逆転負けを喫するという悪夢のような時間となりました。結局、翌週の試合からはベンチに入れず、その後Bチームに逆戻り。

二度目は大学4年になる直前の3月でした。プレシーズンはほとんど離脱していましたが、復帰後Bチームの2試合で5得点を挙げ、これはAチーム行きあるなと思っていたら案の定昇格の連絡が来ました。アミノバイタルの初戦、ベンチ入りの予定が登録の関係で流れてしまいましたが、続く山梨学院戦で久しぶりにAチームで試合出場を果たしました。ですが、その後の練習試合で何もできず、リーグ戦の開幕前にBチームに戻され、ついにそのまま昇格することはありませんでした。練習ではある程度手応えもあったのですが、練習試合で正直なところ自分の実力の限界を感じてしまいました。ギアの上がった相手はそもそもスピード感が違い、ついて行くことすらできませんでした。





中学、高校では、下級生の時から僕は試合に出場することができていました。特に高校では劇的ゴールを何度も決めるなど活躍していました。それでも大学の部活動では、所詮Bチームレベルの選手でしかありませんでした。Aチームで活動した期間は現実を知ることとなりましたが、一方でチームを代表して勝利のために戦うことができた貴重な時間でもありました。

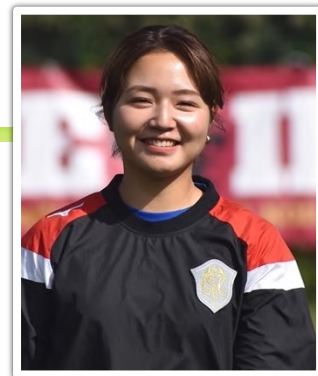
サッカー面ではやや暗い話になってしまいましたが、ア式で出会った仲間との思い出は些細なことでも忘れられないものです。学年旅行で目撃した同期どうしの喧嘩、スキーで肘をパッキリ切ったこと、追いコンでフレンチにビビりすぎてリクルートスーツを着て行ったこと、サバゲーで先輩が乱射しているのを見てしまったこと等々、ア式に入ったからこそその貴重な思い出がたくさんできました。今、もう一度1年生の4月に戻れるとしてもア式を選ぶくらいには充実した時間が過ごせたと思っています。



**【補足：令和の追いコン】**  
左の写真は、赤坂の仏料理店で開催された山本を囲む追いコン。卒業する4年生1人に対し後輩が各学年1人か2人ずつ集まり食事やアクティビティを楽しむ。追いコンの費用は4年生が払い、後輩はプレゼントを贈るのがア式流。全体での追いコンも別途やるという。

## ア式での学びに感謝

七海 碧 (4年 MGR / 福島・安積高)



まず、私たちが4年間恵まれた環境でサッカーに励むことができたのは、ひとえに、この西松会新聞をお読みくださっている一橋大学ア式蹴球部 OBOG の皆様のご支援とご指導の賜物と深く感謝申し上げます。そして4月からは、私自身が現役部員を応援する者の一人としてア式蹴球部に関わることができることを大変光栄に思います。

さて、この西松会新聞への投稿を依頼されたのは引退から3ヶ月ほど経った頃でした。3年半毎日部活と共にあったにも関わらず、不思議なことにその記憶はすでに過去のものとなっていました。細かい記憶は抜け落ちていたし、辛かったことも苦しかったことも結局美化されるにはあまりに早すぎると、少々驚きもありましたが、それでも私にとっては、ア式での4年間はかけがえのない時間であったことに間違いありません。

初めは、仕事もできて、気配りが行き届いていて、いつも笑顔でみんなから愛される、それでいてとても謙虚な、マネージャーの鑑のような先輩を見て、一緒に部活をしたい！という思いで入部したこと。1年生のうちは、同期に迷惑をかけ、先輩からたくさん怒られ、部活の楽しさもなかなか見出せなかったこと。2年生になる頃には、主務として部に貢献できるようになり、やっと自分の帰属意義を感じられるようになったこと。コロナ禍でスタッフやプレイヤーと描き尽くせないような対立や衝突を繰り返したこと。最終学年として、終わりを意識させられると共に、後輩や同期との部活が心から楽しいと思えたこと。いつまでも、プレイヤーに引け目を感じ、マネージャーのポジションには完全な充足感を得られなかった私ですが、それでも最後のリーグ戦のベンチに入って、プレイヤーが整列する姿を見たときには、山あり谷ありの4年間で走馬灯のように蘇ってきました。最後であることを強く噛み締めると共に、ここまで自分を育ててくれたア式蹴球部に深く感謝せざるを得ませんでした。人との関わり方、辛い時の堪え方、どれだけ眠くても、二日酔いでも、遅刻せずに部活に行く精神力、喜びを共有できる感動など、私が大学4年間で学んだことは、大学の講義からよりも部活からの方が多かったように思います。

コロナの前後で、ア式蹴球部は大きく変わりました。

組織としての運営も、練習の様式も、人間関係も、本当に大きく変わりました。

良い結果は良い関係性からというア式イズムも大好きだったし、より運営面で強化された新たなア式も素晴らしい。新旧どちらがよかったか、という話ではなく、私はこの組織の過渡期に立ち会えたことが、一つ自分の糧になったように感じています。このア式の進化はまるで、刻一刻と変化する世界の縮図のようで、自分自身の軸を動揺させることなく、それでいて柔軟に時流に対応し続けなければいけないことを、私はここから学びました。

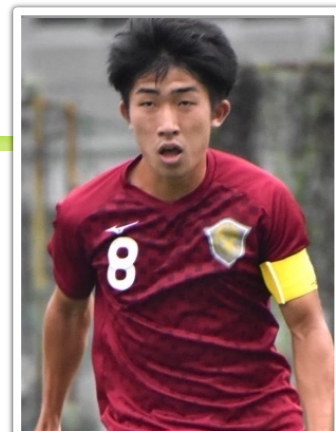
大学4年間においても、これからの社会人生活においても、ア式での学びはかけがえのないものであり、また、共にア式で過ごした同期を始め、先輩、後輩、そしてOB、OGの方々には本当に感謝しかありません。自分がこの部活に所属できたことを本当に誇りに思います。



## 令和5年度シーズンに向けて

### 🏆 最大の挑戦

渡邊 直樹 (新4年 主将 / 東京・暁星高)



いつも多大なるご支援ご声援、本当にありがとうございます。  
入学当初からコロナの影響で思うように活動できない日々が続いて  
きましたが、昨季から会場公開での試合が開催できるようになり、  
皆様の目の前でサッカーができることに喜びを感じております。

昨シーズンを振り返ると、チームの副主将を務め、自分のことだけでなくチームのこともよく考えるようになり、これまで以上に自分の行動や言動に責任が生まれるようになりました。試合でチームがうまく機能していない時や練習の成果を発揮することができていない時に、どのように自分が振る舞えばチームとして良い方向に進んでいくか、そのようなことを考えながら活動に取り組んでいました。当然、全てが全てうまくいく訳ではありませんでしたが、失敗を繰り返しながら成長をしていくことができたと思っています。今季は主将という役割を担い、これまで以上に自分の行動や言動が良くも悪くもチームに影響を与えることがあるかと思いますが、そういった状況でも引き続きサッカーを楽しんでいきたいと思っています。

今季から関東リーグの3部が創設され、従来の東京都リーグは神奈川県リーグと合併し、「関東大学サッカー 東京・神奈川リーグ」となりました。それに伴い、昨季東京都2部の上位5チームは東京・神奈川リーグ1部に昇格、一橋は引き続き同リーグの2部に残留しました。重要な局面の試合で勝点を積み上げることができず、まだまだ競技者としてのメンタリティーが劣っていたのが昇格と残留を分けた大きな要素であると考えます。  
令和5年度シーズンの東京・神奈川リーグ2部の参戦チームは以下の通りです。

大学	昨年度	大学	昨年度
◆日本大学 文理学部	東京2部 6位	◆工学院大学	東京3部 1位
◆東京都立大学	東京2部 7位	◆芝浦工業大学	東京3部 2位
◆一橋大学	東京2部 8位	◆日本大学 生物資源科学部	東京3部 3位
◆国際基督教大学	東京2部 9位	◆松蔭大学	神奈川 4位
◆東京工業大学	東京2部10位	◆神奈川工科大学	神奈川 5位
◆都留文科大学	東京2部11位	◆防衛大学校	神奈川 6位

東京都2部リーグで最もインパクトのあるチームになる

これを今季のチーム目標として設定しました。自分たちに対しても、対戦相手に対しても、OBの皆様のような観客に対しても、何かのインパクトを与えていくことができるように、一人一人がア式蹴球部の一員として誇りを持って、活動していくことを目指します。

自分自身としては、この3年間公式戦での出場機会をたくさんいただき、勝って心から喜べた試合も情けない姿を見せて負けた試合も色々経験しました。ピッチ内での取り組みが主将の全てではなくピッチ外での貢献も大事にしていきますが、自分の存在を最大限に活かすことができるのは、やはりピッチ内だと考えています。この部で選手として関わるができる最後の年で、より多くのものを部に還元すると共に、これまで以上に挑戦を繰り返し、失敗をしながら成長していくことを目指していきます。

2年生の時に小平キャンパスの人工芝グラウンドができ、日々いい環境で練習ができることや公式戦を小平で開催することができる事に喜びを感じております。今年は皆様の前で躍動する姿をお見せできることを部員一同楽しみにしております。ワクワクするようなサッカーをお届けしていきたいと思っておりますので、ご支援ご声援よろしくお願いたします。

雨にも負けず、雪にも負けず、小平Gで試合ができる！



雪：2023. 2. 10

雨：2022. 5. 21

## 🏆 価値ある挑戦を

ちかおか しょう  
近岡 頌 (新4年 学生監督 / 東京・麻布高)



OB・OGの皆様、平素より多大なるご支援、ご声援をいただき誠にありがとうございます。昨年に引き続き、今年も学生監督を務めさせていただくことになりました。木室ヘッドコーチを招聘し、万全の指導体制のもとチームを前へ前へと押し進めていくことができるよう全力を尽くす所存です。

昨年度は有観客試合の機会にも恵まれ、

ようやくOBOGの皆様にご試合にお越しいただくことができました。

有観客試合では無敗を維持しており、サポーターの皆様の応援の力を強く実感しております。

7月末に駒沢第二競技場で行われた東京大学との試合は鮮明に記憶に残っております。600名を超えるサポーターの方々に来ていただき、多くのOB・OGの皆様にもご来場いただきました。

グラウンドから観客席を見渡した時に、グッズを身につけて、プラカードを掲げて応援していただいている方が目に入り、私たち現役部員は多くの方々の支援によって活動することができていること、皆様のクラブへの想いを背負って戦っていることを強く感じました。

1プレー1プレーに起こる拍手や歓声は経験したことがないものであり、そうして作り上げられた高揚感に溢れたピッチで、躍動感のあるプレーと勝利を届けることができ大変嬉しかったです。以降の活動ではサポーターの皆さんにより成長した、逞しくなった私たちをお見せできるように、勝利の喜びを共有できるようにと、より一層意欲的に取り組むことができました。



昨年は11チーム中8位、前年度よりも5つ順位を落としてしまい厳しい結果となりました。

上位チームからはいづらか勝ち点を奪い、自信を得られることができた一方で、順位争いをしてきたチームからほとんど勝ち点を奪うことができず、混戦を抜け出すことは叶いませんでした。

サポーターの皆様にとってはフラストレーションが溜まるシーズンであったと思います。

私たちはグラウンドなどの施設面、会計面、スタッフなどのサポート面で他チームより恵まれており、昨年の結果には只々自身の実力不足を感じるばかりです。チームとしてこの結果を真摯に受け止め、次へと進む原動力にしていきたいと思います。

新チームでの初めての公式戦であった東京カップでは

1年間の取り組みに一定の成果を感じられました。1部リーグの帝京大学に対して、前半は被シュート0本に抑えるほどゲームをコントロールすることができました。惜しくもPK戦で敗れたものの、1部リーグ相手に通用するポイントを見つけられました。また戸田さんに構築していただいたフィロソフィーを引き継ぎながら、アップデートしていく一貫した強化方針に関しても成果が出てきていると思います。4年生が引退し、まもなく開幕した大会ではありましたが、他チームと比較して、戦術的機能性の高いプレーを披露することができ、チーム全体にプレーコンセプトやフィロソフィーが定着してきていることの表れであると分析しています。本年度は昨年機能した保持局面とトランジション局面に磨きをかけつつ、課題であった「競技者としてのメンタリティ」にも着手し、競争的な環境で、緊張感のある場面でも成果を上げられるチームを目指して活動します。

#### 「東京都2部リーグで最もインパクトを与えられるチームになる」

この目標を掲げ今年度は活動します。競技面では戦術的柔軟性、躍動感のあるダイナミックなアクションの組み合わせによって驚きと喜び、そして感動を与えられるチームになります。そして上位争い、昇格争いをできるチームにしていきたいと思います。またフロントスタッフを中心に精力的に活動している事業面にも注目していただきたいです。充実した観戦体験の提供を目指したオンライン、オフラインともに様々な施策を行って来ています。小平グラウンドでの公開試合開催も認められ、多くの試合にお越しいただけるようになります。競技面、事業面ともに充実したパフォーマンスをあげられるよう努力してまいりますので、是非小平グラウンドに足を運んでいただくと幸いです。皆様にお会いできる日を心待ちにしております。今年度もご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。



## 私の学生 LIFE

## 🏆 留年の原因をまじめに考えてみた。

かいや  
海谷 俊輔（4年 DF / 北海道・旭川東高）



僕の人生で一番の壁は何か。

どこからどう考えても進級 / 卒業要件の単位取得数と答えざるを得ない。

今までの人生で、何かに「落ちた」「名前が呼ばれなかった」みたいな経験はいくつあるだろうか。大学2年の3月、あ、1回目の2年の3月、

進級者の学籍番号一覧を見たところ、自分の番号が無かった。「絶望した…」と僕の当時の心中を

お察しする方もいらっしゃるだろうが、それは間違い。間違いというか甘い。単位が取れない

大学生の姿を見くびってしまっている。というのも、そもそも成績認定のための材料である

レポートや出席を教授に提出していないため、単位がもらえるはずがない。人は、そこに多少なりの

見込みや希望があるからドキドキするのである。と、そんなわけで、さらっと計算し進級要件に

届かないことがある程度分かっていた僕は「ふう～」と結果を受け止めた。ここからは、

なぜ留年したのか、どうすればよかったか、について考えてみる。

## 【家の経済状況】

“いじめられた方にも原因がある”の理論と同じだろう。

当然留年するような過ごし方をしていた奴が悪いが、もし5年大学に通おうものなら

即破産するような経済状況であれば、さすがに留年を否が応でも回避するようにしていただろう。

父が病死したため海谷家は母子家庭であったが、近くにいた母方の実家や近所の方々が、それは

それは多くのことを協力してくれたし、何より父方の実家には、おそらく破格の金銭面での援助を

していただいた。だからというわけではないが、子供2人とも留年するという全くしょうがない

ことになってしまった。

## 【大学特有の環境】

次に環境について。ここが、おそらく一番大きな要因ではないだろうか。

大学は決まったクラスやメンバーでの生活リズムがなく基本的には全て個人の時間軸で動いている。

これがまずかった。高校の時から授業の提出物などはちょっぴり壊滅的でだらしなかったが、

クラスみんながいてどうにか乗っかって提出したり、というか、そもそも授業に出さえすれば

卒業が危ぶまれるなんてことはありえない。次の舞台へという部分で考えれば大学受験さえうまく

いけばそれでよかった。ここでみなさんは、大学でだって友達作って講義を受けりゃいいだろうと

思うかもしれない。ここもひとつ要因が思い浮かぶ。私は旭川市で唯一の公立ではない小学校に

入った。そこから高校卒業まで、環境は変われど友達の多くはもともとの知り合いみたいな感じ。

何が言いたいかというと、友達関係をゼロから作るという経験が皆無だったのである。



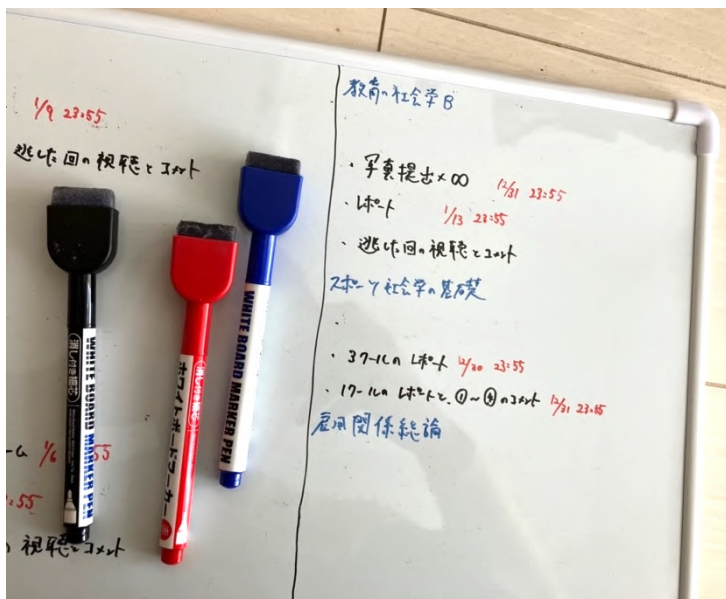
別に僕は全くもって人見知りではないし、人と話すことに抵抗はない。でも、図々しさがまるでなかった。そのため必要がない中で自分から話しかけたり、ダル絡みをして助けてもらいたいなことをしなかった。結果、単位の乗り越え方の1つである、協業というものが叶わなかった。

### 【自分の性格】

小中高とほとんど学校をサボったりしたことはない、サッカーでは割と責任感があるプレー選択をしている自負がある。都学連では、なんちゃってではあるものの学生幹事長を任されるくらいにはちゃんとしていた。これらと大学の授業で何が違うか。それは、罰が即時で降りかかってくるか、誰かに即座に明確な迷惑がかかるか、といったところだ。そういえば、ア式では4年間で2回しか（しかとか言ったら怒られるかもしれないけど）遅刻をしていない。それは行かないと絶対すぐ連絡が来るし、というか怒られるし。時刻通りに指定の場所に到着する能力があることは証明されている。

### 【対策とこれから】

いろいろ書いたが、これらを踏まえてどうするか。4年目の後期から、ある施策を始めた。それは課題管理ホワイトボードの運用である。ここで重要になってくるのは、僕の恋人というか奥さん（2留しなければ）というか妻（2留しなければ）というか彼女の存在だ。小学1年からクラスが一緒になったりの仲なのだが非常に優秀な方である。単位は当然3年でほとんど取得し、ゼミでは危うく学会発表をさせられそうになったような人だ。さてホワイトボードに話を戻すが、どんな仕組みかというと提出課題をホワイトボードに書いていき、彼女に提出完了画面を見せると、その課題の文字を消せるというシステムだ。これは非常に有効で、1番メインの効果としては、仮に提出画面を見せずに期日が過ぎようものなら、彼女から何かしらのコメントが入ることになる。実際これを運用し始めた秋学期は単位をすべて取得することができた。バーやFがない成績表を人生で初めて見た。さて僕が+1年に留めて卒業できるかは、この運用にかかっている。応援してください。





## 🏆 私のバイトライフ

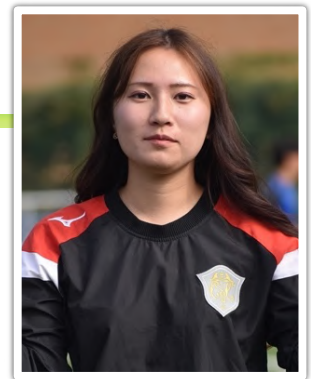
岩元 <sup>はるな</sup> 陽菜 (4年 MGR / 神奈川・多摩高)

平素はたくさんのご支援、ご声援本当にありがとうございます。  
部活を引退してから早くも4ヶ月が経過してしまいました。卒業まで残すところあと1ヶ月少々となり、今は卒業旅行のローマからフィレンツェに向かう列車でこの文章を書いています。わたしの大学生活は部活を中心にしたものであることは間違いありません。しかしながら部活については他の4年生が言葉にしてくれていると思うので、わたしは部活以外での大学生活について書いていきたいと思います。

大学生活で打ち込んだことは何ととってもアルバイトです。  
全部で9種類、部内屈指のアルバイトとして、身を粉にして働いてきました。  
面白いアルバイトをたくさんしてきたので、幾つかご紹介させていただきます。

まずはお皿屋さんです。お皿屋さんは基本的にワンオペなのですが、  
1日の売上が僅か3000円という日も多くありました。  
従業員は立っているだけで、時間が永遠のように感じられる程暇でした。  
結局、そのお皿屋さんは僅か4ヶ月ほどで閉店してしまいました。  
敗因は隣にニトリがあったからだと思います。

続いては家庭教師のアルバイトです。  
担当のお宅のお父さんがとても愉快な人で、休憩時間によくビールを飲ませてもらっていました。  
かなりゆるゆるなおうちでした。加えて、成績は合格ラインから遠く、ヒヤヒヤしましたが、  
生徒さんはミラクルを起こし無事第一志望の都立高に合格しました。



次に、焼肉屋さんです。わたしは4年間で3つの焼肉屋さんで働きました。

1店舗目はチェーンの食べ放題の焼肉屋さんでしたが、残りの2店舗は、いわゆる高級店でした。高級な焼肉屋さんは美男美女のバイトが多く、とてもギスギスした雰囲気でした。

『御局様』という概念を、初めて現実として知りました。給与が高くて職場環境が悪いのは精神衛生上良くないということ、わたしはここで身をもって実感しました。

最後に、焼鳥屋さんです。焼鳥屋さんはとても楽しい職場でした。

賄いがとても美味しかったです。そしてたくさんお酒が飲めました。

そのせいでたくさんお酒の失敗もしました。

「酒は飲んでも呑まれるな」は社会人になっても掲げていたいスローガンです。

その他にも、コンビニやアパレル、餃子屋さんなどたくさんの経験をしました。

夜遅くまで働いて朝部活に行くのは大変でしたが、充実した日々だったと感じています。

コロナによって対面授業がなくなった分、たくさんの時間を部活とアルバイトに使うことができ、

それはそれで良い選択だったと思っています。たくさんの人と出会い、話し、

価値観を共有できたことは、とても良い経験になりました。社会人になっても、

この4年間で培った体力、バイタリティ、社畜精神をもって闘っていきたいと思います！

4年間お世話になりました、ありがとうございました。



## ⚽ ア式に費やす大学時代とは

ゆうき  
向井 友紀 (新4年 / 静岡高)



テーマが漠然としていると筆が進まないので、

「私の学生ライフにおいて他の人と異なる点」について考えてみたいと思います。書いている中で自分についての理解が深まれば幸いです。

大学生という枠で考えてみると、ほかの大学生と比べて自分を

最も特徴づける点は、おそらく体育会部活動に所属しているという点ではないでしょうか。

友人などに自分が体育会に所属していると告げると、たいてい驚かれます。そして二言目には

「すごいね～」と言われます。こういった反応や自分が SNS などから仕入れる一般的な大学生の生態についての情報に鑑みると、おそらく大学で体育会に所属している点は特徴的なようです。

そうはいつでも、世の中に大学で体育会に所属している学生は山ほどいるでしょう。

では、体育会系部活所属者という枠の中で自分はどのような点において特徴的なのでしょうか。

ひとつ考えられるのは、どちらかというと学業の方に重心を置いている点だと思います。もちろん部活も本気で取り組んでいます。しかしサッカーに将来の自分を見出そうとは考えていませんし、それに関連した職に就こうなどの考えも今のところはありません。これは自分の身近にいる他の部員にも共通していると思います。

もっとも、同じような境遇にある人は依然大勢います。

自分が所属しているア式蹴球部に至っては、ほぼ全員が同じ考えをもっていると言えるでしょう。

では、この母体の中で、自分は他の人と何が違うのだろうかと考えます。しかし、その答えが見つからないというのが正直なところです。あるとしてもパーソナリティの部分でしょう。

決定的に違う何かを自分は持っていないし、周りを見てもそのような人は、なかなかいません。

このように考えると、今所属しているア式が自分のアイデンティティの主要部分を占めているということに気づかされます。今の段階では、それ以上に自分を語れるものを見つけるのは難しい、つまり今のところ「私の学生ライフ」＝ア式の活動ということになるのでしょうか。

では、ア式の活動にどのような意義があるのでしょうか。

様々な選択肢がある中で選んだ多くの犠牲を払うこの活動は、今後自分たちに何をもたらしてくれるのでしょうか。様々な答えが考えられると思いますが、自分が最近よく感じるのは、サッカーにおける精神性には、それ以外の場面に通じるものが多いなということです。

例えば、サッカーでよく言われるチャレンジの重要性です。サッカーは、練習や試合の中でチャレンジ・失敗を繰り返し、それから学ぶことで成長していくスポーツであり、どれだけチャレンジできるかが重要になってきます。そして実社会においても、常に自分の目標のためにチャレンジを繰り返す前向きな姿勢が成功への鍵だと個人的には感じています。

大学生にもなると、毎月のようにテストや行事があったりした高校時代までと違って挑戦というものから遠くなるし、壁を自分自身で設定しなければいけません。つまりチャレンジの機会が少なくなるし、それに対する抵抗が大きくなります。このような中でサッカーは、チャレンジを思い出させてくれるいい機会だと思います。その重要性をこの組織に植え付けたのは戸田和幸前監督でした。僕自身もプレー中の消極的な姿勢を何度も咎められました。やはり、つらい時になお前を向いて次の挑戦をするということは簡単なことではありません。多くの部員が苦しんでいましたが、このことに向き合ったという経験は非常に貴重なものだったと思います。

ピッチ外でもユニークな活動を展開しています。

例えば、先日は小平寮生を対象とした留学生交流会を開催しました。30人ほどの留学生が集まりミニゲーム大会を行って交流を深めました。このような活動はア式のような大きな組織だからこそできるものだと思いますし、一般的な学生ができない経験をすることができていると思います。自分は残り1年という立場です。仲間から原動力をもらい、また互いに切磋琢磨して、次のステップに向かって行けたらと思います。

2022. 12. 5 留学生交流会



向井



## 🏆 私の小平キャンパスライフ

大石 俊輔（新3年 / 東京・三鷹中等教育学校）



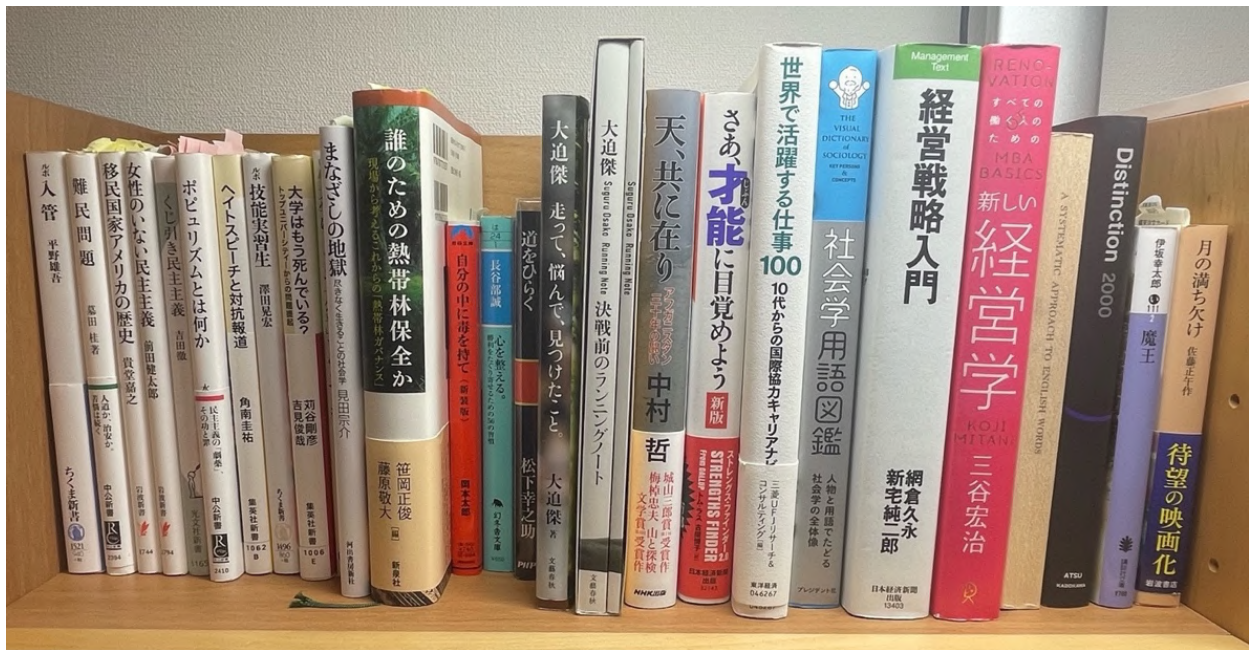
「体感では19歳で人生の半分が終わる」という法則をジャーネーの法則と呼ぶらしいですが、最近は時の流れの速さを顕著に感じるようになり、気づけば入学して2年が過ぎようとしています。遠い未来のことだと思っていた就活がいよいよ目前に迫り、早くからイベント等に参加している同期の友人の話聞いて興味とともに焦りを感じる日々を過ごしています。私もつい先日「就活を始めるのは早いほどいい」という彼らや先輩からのアドバイスを受けて就職情報アプリをダウンロードし、さっそく自己分析をしてみました。

さて、「私の学生ライフ」についてですが、コロナ禍に普及したオンライン授業のせいもあって、この1年間は週に1日しか登校しなかったため、いわゆるキャンパスライフからは程遠いサッカー中心の生活を送っています。1日の流れを少し説明すると、朝は5時半に起きて怪我予防のための体幹トレーニングをし、朝ご飯を食べて8時からの練習へ向かいます。練習後は同期の仲間と昼食に行き（最近は友人の勧めでジムに入会し食後にフィジカル強化も行っています）、家に帰ったら課題をするか、少し昼寝をしてバイトへ。帰ったらご飯とお風呂をすませてストレッチをして22時には寝ています。8時間は寝ないと疲れが取れない体質が悩みですが、だからといってやることもないし、どうせ社会人になったら夜遅くまで働くのだから、と割り切ってぜいたくな睡眠をとらせてもらっています。

ここまで読んでいただければ分かるように、私は普段からさほど勉強しているわけでもなければ遊んでいるわけでもない、世の大学生から見れば面白味に欠けるような生活を送っています。しかし私にとっては、これ以上ない充実した毎日です。というのも長いリハビリの甲斐あってか怪我でほとんどプレーすることができなかったア式1年目に比べて昨年からはプレー機会が大きく増加し、日々自分の成長やチームへの帰属感を感じることができているからです。怪我が多かった時期は、体力の低下や戦術理解の不足などによって思ったようなプレーができず悔しい思いをしたので、何事もなくサッカーを続けることができている今は、支えてくれる両親や毎日一緒に練習に励んでいる仲間、僕の身体のことを誰よりも理解して的確なメニューを組んでくれる接骨院の先生にとっても感謝しています。

サッカーとは別の話をもうひとつ。

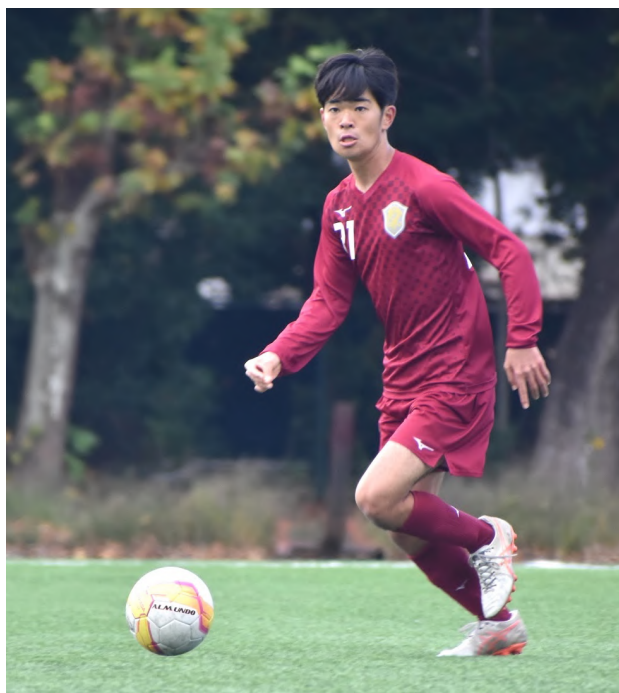
私は毎日の小さな目標として「本をたくさん読む」ということを掲げていて、特にいろいろな世界で成功した人の自伝やエッセイを読みたいと思っています。最近読んだ本ではマラソンの大迫 傑選手の本が印象に残っていて、「日々の練習に妥協なく取り組んでいるから結果に関しては良ければいいし、悪かったら仕方ないと割り切れる」という考えには、今のア式のスタイルに通じるところを感じました。



私はまだ A チームに呼んでもらったことがないのであまり詳しくはないですが、一昨年のリーグ戦後の全体ミーティングで、戸田さんが

「サッカーには相手がいるから、こちらが全力を出しても勝てるかは分からない。

毎日の練習で出来ることを全てやって少しでも勝てる可能性を上げていくことしかできない」と言っていたのを覚えています。先日の W 杯ドイツ戦後のインタビューで決勝点を挙げた浅野選手が同じことを言っていました。大学生のうちからこのような思考に触れることができていることをとても幸せに感じています。



読書の話に戻って、今はサッカーの長谷部選手、パナソニック創業者の松下幸之助さん、芸術家の岡本太郎さんの本が、買ったまま放置されているので、これらの本を読んで新しい考えに出会えるのが楽しみです。

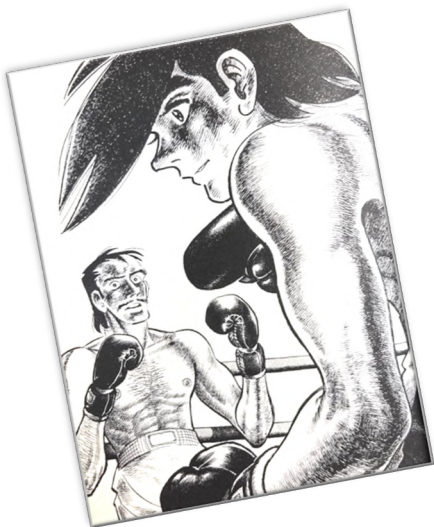
最後まで読んで頂きありがとうございました。締め切り直前まで執筆をさぼっていたため書き終わりが 23 時になってしまいました。明日の練習に影響がないよう寝たいと思います。最後になりますが、新シーズンもア式蹴球部への熱い応援をお願い致します。

# アシキのジョー

ゆうのすけ  
松田 宥之介 (新2年 / 東京・富士高)



昨年の4月に大学に入学してから、約1年が経ちました。マスク越しのコミュニケーションにも慣れて、制限が緩和かで世間が揺れるなか、学生としてもクラブの一員としても変化に大きく振り回される1年だったと感じます。自分にとって、大学で部活に入ってサッカーを続けるということは1つの挑戦でした。法曹を目指すために大学へ行きたい、と半ば強引に語った夢を両親が学費という形で応援してくれている以上、勉学に励むのが筋というもの。好きなことに打ち込める部活という環境の魅力以上に学業との両立に対する不安が自分を押しつけていました。ただ、私のバイブルであるボクシング漫画「あしたのジョー」を読み直して、“一度きりの大学生活なのだからジョーのように真っ白な灰になるまで戦い燃え尽きたい”と思い、入部を決めました。今の自分は「あしたのジョー」でいうと、力石 徹に初めてクロスカウンターを打ち込んだ頃のジョー。練習の成果は出てきたものの、まだまだプレーに未熟さや不安定さが見えます。自分のア式人生におけるホセ・メンドーサ戦はいつになるのでしょうか。今後もひたむきにサッカーと向き合っていくつもりです。





高円寺の実家から通う私の学生生活は、基本ア式を中心に回っています。

午前中に練習があるため朝は早く起きるのですが、受験期を夜型で乗り切った自分にとって早起きは苦痛であり、入学当初はかなり苦労しました。しかし毎朝起きるたびに、もう一度眠りにつきたい自分と格闘し、家が小平グラウンドに近い部員を羨むと同時に船橋から2時間近くかけて通う同期に同情するというモーニングルーティンも今ではなくなり、設定したアラームより早く起きるたびにア式中心の生活が身体に染み付いたことを実感しています。

学期中は練習後、部員と一緒に主に学食で昼食をとっていました。

国立の東キャンパスにある食堂の入口に入って右奥は、いわば僕らのホームスタジアム。授業が始まるまでずっと居座るといのが習慣になっていました。ただ1年を通してお世話になった学食ですが、大盛りにすると値が張ってしまうのが玉にきず。もう少し運動部に寄り添ったメニュー内容と値段設定にしてくれないものだろうかと不満を持ちながらも、つい足が向かってしまう場所です。大学が長期休みに入ってから、部活後に同期や先輩方と外食をする機会が増えました。自分たちの活動について少し真剣に話したり、先輩と話しながら来年の自分の姿に思いを馳せたりと、単調になりがちな生活のアクセントになっています。

★国立：東プラザのカフェテリア食堂（2F）・・・お気に入り「チキン竜田丼」 大盛 594 円 / 普通盛 506 円



★学園西町：うどん屋「むぎきり」・・・お気に入り「鶏天うどん」1000 円

練習も昼ご飯も終われば、後は個人の時間になります。

1年生のうち是对面での必修科目がいくつかあり、7時ごろまで大学で講義を受けることもありました。自分は家であまり集中して勉強できないタイプなので、空き教室や図書館に残り、閉館時間まで課題などをこなすことが多かったです。学期中は部員同士、時には先輩後輩の垣根を越えて助け合いながら、単位取得に奔走します。同じ授業を履修している部員とは一緒に講義を受けることも多く、ア式の部員と朝から晩まで顔を突き合わせる日もあります。一方で授業のない今の時期は、自由時間の過ごし方も選手によってまちまちです。バイトに打ち込む者もいれば、趣味に長い時間を費やす者や資格試験の勉強など自身のスキルアップのために努力する者もいます。自分は筋トレに力を入れながら免許取得のために教習所に入り浸る毎日を送っています。もちろんオートマ限定免許を選びました。マニュアルを選ぶ自信がなかったからではないです。ギアチェンジのしすぎで左腕だけが太くなってしまっては筋トレに支障が出るからです。

最後になりますが、100周年ムードも抜けきった今、

ア式蹴球部は新たな岐路に立っています。時に冷静に、時にがむしゃらに、しかし必ず前進するア式のこれからのを、温かく見守っていただけると幸いです。今シーズンも応援よろしくお願いたします。



## 追悼 逝きし仲間を偲んで

コロナ禍3年目の令和4年は、ロシアのウクライナ侵攻、地球規模の異常気象や天災、大幅な円安、カタールW杯での日本の躍進など、本当にいろいろなことがありました。そしてこの年、6名の先輩方が逝去されました。心より哀悼の意を表します。以下に故人を知る方々から寄せられた言葉を掲載し、在りし日の姿を偲びたいと思います。

### 石原 慎太郎 (昭31卒) 2月1日 逝去



### 故 志摩 憲一 (昭31卒)

31年卒業のチームメートは7名であったが、中途退部した中に石原くんがいた。石原くんとは他ならぬ代議士の慎太郎君である。今では、時々世間を騒がせているが、サッカー部2年間の在籍中は極めて真面目な部員であった。とはいうものの作家としての素質や大衆にアピールする人間的魅力は当時から秘められていたように思う。サッカー選手を題材とする作品を一橋文芸に発表したが、そのモデルは知る人ぞ知るA先輩であった。

彼のヘディングは、ミートよりはヘディングの華麗さを絵にしたいというスタイリストの面目躍如たる一面もあった。ボールは頭を掠めるのが多かったが、見事選良の地位を当てた。サッカー部員が見習っては困るが、同僚としては誠に喜ばしいことである。

・ ・ 『60年史』 の寄稿より

## 🏆 橋本 昭一 (昭31卒)

昭和27年のリーグ戦のあとに、東京都国公立の大会が始まり一橋は東京教育大と東大御殿下グラウンドで対戦したが敗れた。(スコア不詳) 石原はCHで出場し、相手のCFをマークする役割だった。その相手が悪かった。のちに日本代表に選ばれた福原黎三だった。背丈は横に並ぶと石原の肩まであるかないかだが、ガッチリした体格でジャンプ力がすごかった。石原はヘッディングの競り合いで、ことごとく勝てなかった。彼の自尊心が許さなかったのか、後に退部した。

## 🏆 嶋田 英司 (昭32卒)

慎太郎兄は3年になると、柔道部へ転部したので、1年間だけ一緒にいました。小平の寮にも居ましたが、絵を描いても上手いし、兎に角センスがありました。只、彼が2年の夏合宿で書いた練習日誌は、後の芥川賞作家らしからぬ文でよく覚えています。

「先輩が To come, or not to come, that is question」日曜日には、若手の先輩が沢山来て、よく絞られました。練習日誌はもっと真面目な事を書けよと思っていたので記憶に残っています。



〈昭和 28 年頃の小平合宿風景〉



【補足】終戦後、小平グラウンドが再び使えるようになったのは昭和27年の春頃。まだ土がブカブカだったため練習の前に砂をまき、戦時中の軍の忘れ物である重い「転圧機」を引いて締めるのが日課だった。

## 浅井 浩夫 (昭32卒) 2月 逝去



昭和30年(1955)三商大戦 優勝メンバー

🏆 橋本 昭一 (昭31卒)

32年卒のメンバー(中路、浅井、佐竹、嶋田、日方)は全員一橋寮生だったと思う。浅井は温厚な人柄で、どちらかと言えば控えめな存在だったが、当時としては大柄で2年の時から試合に出ていたと思う。3年からはLWとして、RW 中田鉄弥(2年)と共にレギュラーに定着し、三商大戦の優勝にも大いに貢献した。卒業後は、日本勧業銀行に入り、馬場 猛(昭31卒)、清水 裕(33)、鎗田良昭(35)等と銀行リーグで活躍したと聞いている。また学業は優秀で昭和32年卒業生の総代だったと、中路か佐竹から聞いた記憶がある。

🏆 嶋田 英司 (昭32卒)

浅井兄は、愛知県の豊橋東高出身で、高校時代サッカー部に所属していました。左のウイングで、いいセンターリングを入れていた印象があります。当時は5-3-2システムで、フォワードは余り守備に貢献しませんでした。浅井兄に限らず、相手を執拗に追いかける姿勢に欠けており、GKだった私は後方から悔しい思いをしていました。浅井兄は、勧業銀行(後の第一勧銀)に就職、若い時に在米勤務もしていました。安らかに眠りください。

鎗田 良昭 (昭 35 卒) 12 月 19 日 逝去




晩年の鎗田

### ⚽ 古河 洋 (昭35卒)

今年に入って奥様から鎗田君の訃報を受けたのは大変寂しく残念なことでした。現役時代の彼は副主将としてタフで走り回るミッドフィールダーでした。また、相手が先輩だろうが後輩だろうが歯に衣着せぬ物言いで、それでいて憎めない男でした。後年脳梗塞で倒れてからも車を運転するなど活動範囲を保っていました。3年次のリーグ戦、唯一の有料試合だった小石川サッカー場での東大戦では、彼のミドルシュートがバーをたたき、あれが、あと 10 センチ低ければ引き分けに持ち込めたのにと悔しかったことを思い出します。これで昭和 35 年卒の仲間も 3 人が鬼籍に入りました。ご冥福をお祈りします。

【補足】小石川サッカー場は、昭和 33 年 6 月のアジア競技大会（東京開催）のために新設された日本初のサッカー専用競技場。ここで 同年 11 月 22 日に行われた関東 2 部リーグの東大戦は、一橋が優勢に試合を進め多くのシュートを放つがゴールを割ることができず、CK からの 1 失点で惜敗した。この有料試合のチケット代は 1 人 50 円だった。

## 吉田 浩二 (昭38卒) 3月15日 逝去


 石井 暢生 (昭38卒 GM)

突然、故吉田弘司君を偲ぶ寄稿を依頼され、戸惑いを隠しえないのが正直な心境である。小生が4年生の時の昭和37年度次関東リーグ2部のリーグ戦は、故岡田紀雄君が主将としてチームを引っ張り、最終成績は3勝4敗で同率3位の成績で終わった。春の国公立戦で、東大(同じ2部)筑波大(1部)を破って優勝をした勢いから、秋のリーグ戦で、東大に1対0で惜敗したこと、リーグ同率3位に終わったことは本当に残念なことだった。我々の年次は、東京教育大学附属高等学校出身で、インターハイ出場経験がある岡田紀雄君がいたほか、故菊池英輔君(主務担当)以外は全員自宅通学者で、同期の結束が高かったことは確かにあった。

昭和37年度次は、優勝を目標に、帰省する者には、全員ボールを持参し得ることとし、春合宿(小平合宿)は初日からある程度の体力とボール扱いに慣れている前提で、きつい練習でスタートした記憶が残る。休暇中の体力練習に手を抜いたために3日ぐらいから落伍する部員も数人いた。この方針は岡田主将の強い肝いりでGMと最上級生も同意していたが、最上級生ほどきつい練習でもあった。今から思うと、よく皆ついて来てくれたものだと思う。

昭和 37 年次の成績が良かったのは、岡田君の奮闘が目につくが、FW の川村（韓）、野上、山内（伊藤）、DF の吉田、清水、細野諸氏の最上級生に加えて、3 年生の森岡、石綿、永山、池田、石井、大橋、2 年生の古川、1 年生の清水の面々の活躍があったからでもある。連日の練習の中で、スロー、ダッシュなどのランニングなどのきつい練習は、レギュラー、サブに拘わらず叱咤激励を求めたが、最上級生が根を上げるまで距離と時間をかけ、体力アップ、持久力アップを図った。そして下級生の範になるべき頑張りを求めたのが、誰あろう、故吉田弘司君その人であった。

小生は、グランドマネージャーとして、全体練習の流れを見て判断したが、練習種目、スピード、時間のタイミングは、吉田君の動き、スピードを把握しながら、時には吉田君のサインを見て、練習種目を変更したり、スピードダウンしたりした。最上級生は、暗黙の裡に、小生の笛のタイミングを知るようになり、小生にとっても遣り甲斐があったと思う。故吉田君は、先発メンバーから外れた時も意気軒昂に応援に回り、いつでもピッチに立とうと意気込みを示していた選手であった。

古河電気工業に就職し、会社のサッカーとの接点も多く持ち、Jリーグ発足の下積み働きをし、今日の盛況なサッカーリーグの礎を作ってきた一人で、サッカー愛好者の一人として賞賛したい。また、晩年には「日本自由画壇展」に籍を置き、長い間、出展し、賞も受賞している。



第 40 回記念日本自由画壇展（2014）

佳作賞

春国岱

吉田弘司



## 中澤 泰二 (昭44卒) 12月13日 逝去



⚽ 佐藤 哲太郎 (昭44卒)

大学入学時以来60年の付き合いである。

長い付き合いの中で未だにはっきりと記憶にある三つの思い出を書いてみようと思う。

あの世で読んでくれるといいのだが。

卒業後2年目

彼は三菱商事（小生は伊藤忠）で鉄鋼原料を担当していたと記憶している。

ある時、彼から伊藤忠での同業者を紹介するので一杯飲もうという誘いを受けた。

その男は同期で木幡 泰君という者で大昔「松島とも子」と共演していた「小畑やすし」と言う子役だと後から知った。これをきっかけに飲み会、麻雀と何度か共に楽しんだ。

木幡君も10年ほど前に心筋梗塞でこの世を去った。今頃は二人で旧交を温めているに違いない。

夏合宿

今から考えるとなんと無茶な合宿をしたことか。

水も飲めずひたすら夏の炎天下のもとで苦行を強いられたが、

不思議と熱中症（当時この固有名詞はなかったかも）で倒れた者はいなかったように思う。

合宿中は勿論三禁（禁酒、禁煙、禁麻雀）であったが、きつかったのは煙草が吸えなかったことだ。合宿の最初はヘトヘトで欲望を感じなかったが、身体が慣れるにつれジワジワと欲望が頭をもたげてくる。お互いどちらからともなく「吸いたいなー」「そーだなー」「よし吸おう」ということになり、夕食後の自由時間、近くの銭湯からの帰りに実行に及んだ。合宿所には煙草は持ち込めないで、人気のない通りを選び、古木の割れ目に隠しておいた。小生は小平の住人、地理には詳しくばれないようなルートで合宿所に戻る。戻る前には匂い消しのため、駅近くで餃子を食べるのが決まりであった。実にうまいタバコであったと今でも思う。

### 夏休み

夏休みになると地方出身者は郷里へ戻ってしまい、我々東京在住者には退屈な夏休みだった。どこかに旅行へ行こうにも先立つものがなかった。そこで二人でアルバイトをして資金を稼ぎ、海に行こうと考えた。桐朋高校の友人から桐朋小学校の校舎建築工事のアルバイトを募集しているという話を聞き込み、渡りに船と申し込みに行った。60年前のことで詳しいことは覚えていないが10日間ほどの期間だったと思う。開始当日に現場でAさんという人が声をかけてきた。見せてくれた名刺にはマーキュリーのマークが入り、肩書は「一橋大学大学院 XX研究室」とある。そして、「何か解らないことがあれば聞いてくれ」と親切に声を掛けてくれたのである。未経験の我々には有難い声かけであった。Aさんには奥さん（そう思っていた）がおられ、弁当を届けに来られた時に我々の分も持参いただき、ご相伴に預かった。優しい思い出はもうひとつある。現場で働いていた高齢の女性が「学生さん、暑いからお食べ」と言ってアイスクリームを、縁もゆかりもない我々に身銭を切って奢ってくれたのである。

アルバイト代の支払日、二人でウキウキと現場事務所に出向いた。事務所の人はAさんから「二人に会う約束があるので私から渡しますよ」との申し出があったので渡しておいたと説明があった。その時はあまり疑問にも思わず、Aさんのアパートに出向いた。ベルを押しても返事がない、不在なのかと思った時に、大家と思われるから方から信じ難い話があった。「夜逃げ」である。大家も名刺を見せられていたので大学にも出かけたが、XX研究室は存在するもAなる者は在学していないと判明。あまりにも突然の驚きで、その後の記憶がハッキリしない。普通なら大事なアルバイト代を持ち逃げされたのだから憤慨して当たり前なのだが、なぜか「あんまり怒る気がしないなー」と思っていたと互いに確認し合ったことは覚えている。現場事務所もAに渡したことの非を認め、アルバイト代を手に入れた我々は翌日から旅に出た。本来ならウキウキした気分での旅行であるはずだが、西伊豆のどこに行ったのかも思い出せず、ただ静かな夏休みだったことだけを覚えている。思い出は、以上。

中澤よ（我々仲間では呼び捨てが当たり前）、あの世に先に行ったのだから我々仲間がそちらに出向くまでは、しっかり稼ぎ、新参者を歓待する準備をしておいてくれ。  
See you again.

渡辺 恵 (昭45卒) 3月16日 逝去



### ⚽ 土井 徳秋 (昭45卒)

渡辺 恵君は、いつも淡々としていた。

どんな時でも、あまり激することはなく、おだやかだった。

年とってから、ひさしぶりに会ったら「隠居するから」と言った。

最近あまり使われない「隠居」という言葉が、なぜか彼には、ぴったりの感じがした。

そんな彼のおだやかさは、育ちの良さからつくられたものだろうと思う。

あまり詳しくは知らないが、渡辺君は、地方の名家で育ったらしい。

かなりの資産家でもあるようだった。

ある時、彼が私に「ゴルフ場を買おうと思ってるんだ」とつぶやくように言った。

私は当然、ゴルフ場の会員権のことだと思って返事をしていたら

「ゴルフ場全体を買うんだよ」と言ったので私は驚いてしまった。

私とは違う世界にいるようだった。

そんな彼だったが人知れず絵画など多彩な趣味を持っていたようだ。  
何でも彼の奥さんの弟が映画監督の大森一樹さんで、時々、家に来るんだよと、言っていた。  
銀行員である彼と映画監督がどんな話をしていたんだろうか。一度、ちゃんと聞いてみたかった。

もうひとつ渡辺君のことで忘れられないのは、ふたりが新入社員の頃のことだ。  
彼が三菱銀行に入り私は博報堂に入った。  
ある時、私が、全日空の広告で盲導犬を乗せられるようになるシステムができたことを  
告知する広告を考えさせられていると話した。すると渡辺君は、しばし考えて、それなら  
「全日空プラスワン」はどうだと言って笑った。それを聞いて私は、とても感心してしまった。  
もう五十年以上も昔のことだが、今も忘れられない。

渡辺 恵君は、なつかしいサッカー部のなつかしい同期の友であった。



そして令和5年3月、この西松会新聞の発刊直前に・・・

清水 幸男 (昭44卒) 3月4日 逝去




〈昭44卒メンバー 前列5名〉

先述した中澤泰二先輩の同期で、現役時代は副主将兼 GM を務め、名FWとして活躍され、卒業後は日本興業銀行、西武石油(株)に勤務されていました。誰よりも現役の試合に足を運び一橋サッカー部に熱い思いを持っていた方でした。突然の訃報に接した同期や後輩の方々から、追悼の言葉が寄せられました。以下に列記し、共に故人を偲びたいと思います。

 有田 稔 (昭44卒)

長兄の故清水征四郎さんと共に大学サッカー部への思いは熱く、現役の試合には足繁く通い、いつも頭が下がりました。コロナも収束しつつあり、そろそろ昭和44年卒の同期会でも再開するかなと話していた矢先でもあり、突然の訃報に言葉ありません。

 山根 言一 (昭44卒)

清水幸さんが亡くなった！言葉が出ません。有田さんのご紹介のとおり尊敬できる先輩でした。ただただ、ご冥福をお祈りするしかできません。合掌



清水征四郎(昭41卒)

令1.10.13 逝去

## 鈴木 茂 (昭44卒)

ほんまにショックです。

コロナ前は、現役のリーグ戦の応援で10年間ほどよくご一緒して、試合後一杯やりながらサッカー談義に花を咲かせたものです。応援席に座ることなく、コートのをうろうろしながら応援、分析されるのが幸男先輩のスタイルでした。(腰が悪くて座ってられないとのことでもありましたが) そんなに早く兄貴の征四郎さんの後を追わなくてもよかったのに、残念です。ご兄弟で酉松会のメンバーで現役時代も重なっているなんて、他にあまり例がないのではないのでしょうか。今晚は一人で献杯します。合掌

## 宮内 正敬 (昭47卒)

清水さんの訃報を頂くとは夢にも思っておりませんでした。大変びっくりしました。

清水さんは私が新入部員の時のグラマネで、有田さんがキャプテンでした。

初めてグラウンドに出た時のことを今でも良く覚えております。

新入部員はあの当方で12-13人ぐらいで、サッカーは今ほど人気がなかったと思います。

練習の最後には、ゴールラインからゴールラインまで約110メートルを行きはダッシュ、戻りはランニングという「新入部員減らし?」のメニューがありました。

その時に笛を吹いておられたのが清水さんでした。結局、夏合宿に参加した新人は4-5人で上記のランニングが功を奏し(?)見事に少なくなりました。

私は、サッカーボールを蹴ったことがない、ルールも知らないド素人でしたが、練習が厳しいという理由でサッカー部に入ったので、辞める訳にはまいりません。

新人が減った理由は、厳しい練習もさることながら、当時の社会情勢、就中学生運動が花盛りで、新人の中には「なんでこの時期に練習なんかするのか」といった声も出ていましたが、

「だったら辞めればよい」と私は答えておきました。社会が騒然としていたのも事実です。卒業後何十年もお会いできずに、このような悲しい知らせを聞くなんて、やるせないですね。清水さん、大変厳しく且つ楽しい思い出を残して頂き有難うございました。

安らかにお眠りください。合掌

## 山崎 彰人 (昭49卒)

幸さんと征四郎さんには現役のころから面倒をよく見てもらい、社会に出てからも何かにつけて本当にお世話になりました。コロナのせいでお目にかかれず、高峰文世先輩と一度飲もうと言っていた約束も果たせず、心残りです。有田三兄弟、清水兄弟と一橋ア式蹴球部の歴史に名を残す選手の思い出に思いをはせながら、ただただご冥福を祈ります。合掌

## 大久保 寧 (昭50卒)

本来であれば、サッカー一部、ゼミ、勤務先の後輩であります私が早く気付いて皆さんに御連絡すべきところでした。最後の最後まで不肖の後輩で終わってしまったなどの思いで一杯であります。まさかあの清水先輩が・・・、なんと言うことだろうか。サッカーにおいては大変な理論家かつ左利きの闘将、仕事の上では温厚な人柄から常に調整役を買って出て、彼が居るだけで場が落ち着く、そんな方でした。もうお得意の「はしご酒」で飲み歩かれる姿も見られません。せめてあと1回は御一緒したかった。そして、多少は恩返しみたいな事もしてみたかった。とにかく寂し過ぎます。合掌！

## 緒方 徹 (昭49卒)

清水幸男先輩のご逝去のお知らせ、大変驚きました。ショックが大きいです。有田先輩も書いていただいているように、兄上の清水征四郎先輩（昭和41年卒）とお二人は本当に一橋のサッカー部への愛情が深い先輩でした。征四郎先輩もそうなのですが、特に幸男先輩は試合会場へ足を運んでくださった回数が大変多かったです。現役に声をかけてくださったり、グラウンドやその後のOBの意見交換で現役の試合ぶりへの思いや、西松会の運営に直截なお話をさせていただきました。ご兄弟お二人共、人工芝の問題では折りに触れ相談にのっていただき、色々アドバイスや励ましもいただきました。本当に感謝しかありません。お会いできなかったのが心に残ります。こころから哀悼の意を表します。

## 高峯 文世 (昭49卒)

清水幸男君の訃報に驚き、悲しみがこみ上げて呆然としております。幸男君と最後にご一緒したのは昨年、駒沢での現役の対東大戦。有田君と共に応援し、勝利の歓喜に浸った楽しい思い出です。現役時代、幸男君は1年後輩で、家も近く、練習帰りは兄の征四郎さんと共に一緒でした。小平の人工芝完成時には私の同期の小林と幸男君と有田君の4人で視察。我々の時代とあまりに違った素晴らしさに感激しました。その後、汗まみれでジョギングした懐かしの玉川上水沿いを津田塾へと散歩。そして恋ヶ窪駅から国分寺へ行き、ビールで食事を楽しみながら、思い出を語り合ったこともありました。ここに幸男君の御霊が安らかに天国へと、征四郎さんと共に祈り申し上げます。





## 🏠 「小平」の歴史に揺蕩う

たゆた

福本 浩（昭 52 卒） 編集長

西松会新聞の 2 代目の編集長になって 10 年になる。

毎年、発刊の時期になると、90 年にならんとする「小平」の歴史に揺蕩う。

先述の山田あきこさんが提供して下さった写真の中に、印象的な 1 枚があった。

山田先輩が商大に入学した年、昭和 12 年（1937）の 7 月 10 日に撮影された下の写真である。



一橋寮の正面玄関の前にあった池の噴水が、くっきりと浮かび上がる。

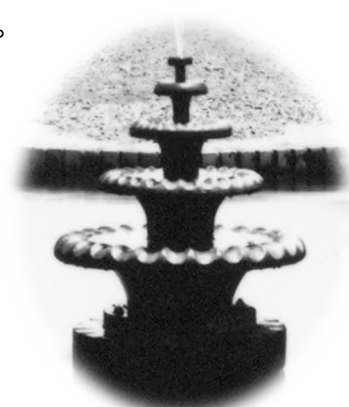
仏塔の頂部に立つ相輪のようなデザインが美しい。そして、池から東の特別教室や講堂に向かって一直線に伸びる並木道。

“初期の並木は、こんなに細かったのか！”と、山田先輩から 36 年遅れて入学した私は驚くばかり。

若い OBOG や現役部員たちには想像もできないと思うが、

この池と噴水、そして並木道は、

戦後 50 年経っても小平キャンパスのシンボルだった。





昭和 39 年 (1964)

噴水の先端が欠け、池の周りは無粋な擁壁で囲まれてしまったものの、並木は長い年月の間に天高く伸び、幹も太く逞しくなっていた。しかし平成 8 年 (1996)、小平分校の廃止以来、この光景は、写真と OBOG の記憶の中にしか存在しない。



昭和 57 年 (1962)



昭和 54 年 (1979)

小平分校廃止から、さらに 27 年の時間が過ぎ、  
令和 5 年度シーズンを担う新 4 年生たちは、「土の小平グラウンド」を知る最後の世代となる。  
今後、西松会会員の世代間ギャップは、ますます広がっていくのかも知れないが、  
それを少しでも埋めるプラットフォームとして、この西松会新聞を続けていきたいと思う。  
我々は皆、連綿と続く一橋大学ア式蹴球部の歴史の一部であり、未来へとつなぐ仲間なのだから。



昭和 17 年 (1942)



昭和 40 年 (1965)



昭和 51 年 (1976)



平成 27 年 (2015)



平成 29 年 (2017)